
恋に時間を

ブルートゥリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋に時間を

【Nコード】

N0953J

【作者名】

ブルートウリー

【あらすじ】

「ごめんなさい、私好きな人がいるんです」

僕の一世代の告白は、あっさりと失敗に終わる。

さらに悪いことは続くもので、そのまますっかり死んでしまった僕。

「生き返るチャンスをおげましょう」

あの世の水先案内人から提示された『生き返る条件』とは……

死亡1時間前に戻って『告白を成功させる』こと。

告白に失敗、あるいは1時間経てばまた死亡してしまう。
チャンスは4回だけ。

生き返るため、そして好きなあの子の心を手にするため、僕の戦いが始まる。

序章〈チャレンジ1回目

思い出したのは古い映像だった。たしかNHKの歴史番組。カラーでないのは当然、音さえない一世紀以上前の褪せた映像が流れていたことを覚えている。

摩天楼の最上部、強風吹き荒れるその場所に1人の男が立っていた。

彼には明らかに不自然な所があつた。その両手に大きな翼を生やし、ヒラヒラとしたマントを纏っているのだ。

彼を観た時の僕の感想は、鳥人間コンテストでもこんな格好の人が出場していたな、だった。鳥人間コンテストと違うのは演者の心意気だろう。解像度の低い映像は彼の顔を隠す。

けれど、高高度の場所から遙か地上を見つめる彼の姿に、ネタや冗談など軽々しい雰囲気皆無なのは分かる。

マジなのだ。その出で立ちは、大空を舞うために用意したマジな代物なのだ。

『ライト兄弟が空を飛ぶより前の時代。人々は空に憧れ、鳥の姿を模倣して大空に挑んだ。結果は、散々で残酷なものであつた』とNHKのナレーターの声が流れる中、摩天楼から飛び立った鳥の格好をした男は、おかしいくらいスムーズにナチュラルに地上へ落ちて行つた……

ああ、馬鹿な男だ。

その時の僕は彼の死を苦笑してしまった。飛行機という圧倒的な科学の産物を知る僕としては、人の身でパラシュートもなく大空に

ダイブする姿は滑稽以外の何ものでもなかった。

だが、今の僕は彼のことを笑えない。

だって。

僕も彼と同じで大空にダイブしてしまったのだ。

彼のように翼やマントを身に付けることもなく、彼のような覚悟もなく……

15分前。屋上。

「あの！ば、僕。ずっと前から松原さんの事が好きでした。よろしいのでしたらなら、ぜ、ぜひ！僕と……僕とお、お付き合いしていただけないでしょうか！」

ずっと温め続けてきた気持ちを打ち明けた。

一世一代の愛の告白だった。

前日に念入りに考えた愛の言葉は松原さんを前にすると、どれ1

つ口から出なかった。代わりに出た言葉は泣きたくなくなるほど情けないものだったが、僕はそれに自分の思いのすべてを乗せて喋った。

「ごめんなさい、私好きな人がいるんです」

即答だった。

『お願いです、OKしてください！』と、内心ハラハラドキドキする時間さえ与えない脊髓反射の返事だった。

あまりにあっさりで、あまりに呆気なくて僕は一瞬何が何か分からなくなった。

「じゃあ」

松原さんは踵を返して、帰って行った。

屋上に僕だけがとり残された。

風が吹く。冬の訪れを予感させる木枯らしだ。
火照っていた身体は、風でだんだん冷めていく。頭もだんだん覚めていく。

「ああ、僕フラれたんだ」

言葉にすると、現状がよく分かる。

僕はずっと好きだった松原さんを屋上に呼び出し、告白し、フラ

れた。

なんだ、教科書通りのどこにでもある話じゃないか。他人ことから同情と嘲笑で迎える話じゃないか。ただ、話の当事者が僕だった、それだけのことじゃないか。

それだけのことなのに……どうして夕日がこんなに滲んで見えるのかな。

どうして目頭だけは冷めてくれないのかな。

「あああああああああ、うわあああああああ」
声にならない声で僕は泣いた。

分かっていたんだ。綺麗で可憐で……高嶺の花の松原さんが、僕になびく事はないと。

でも、賭けたんだ。「わずかでも可能性があるならやってみる」、テレビで観たアスリートの言葉に背中を押されて、僕はやってみたんだ。

よくやったじゃないか、僕は。

松原さんに憧れても物陰からしか眺められないチキンな奴らはたくさんいる。そいつらに比べたら、告白して撃沈した僕はずっと立派なんだ。悲しむより誇るべきことだ。

「あああああああああ」

そう思っても涙は止まらない。もうどうしようもない。

いつの間にか、僕は屋上のフェンスに指を絡めて体重を預けてい

た。

「ち、ちくしょ、ちくしょおおおおお！」

可愛さ余って憎さ百倍とはよく言ったものだ。

失恋の絶望の次に来たのは、松原さんへの怒りだった。

断るにしても礼儀ってものがあるんじゃないのか。もう少し考えてくれないんじゃないのか。それを路傍の石のように軽くフツて……ああ、ちくしょう！

僕は怒りを両手に込めて、フェンスをガンガン揺らした。

それが良くなかった。

物に八つ当たりした僕の行いが良くなかったし、フェンスも老朽化で調子が良くなかった。

ようするに運が悪かった。

突然。

フェンスがあるはずなのに、僕の身体は前のめりになった。

あっ、フェンスが外れた。

間抜けな感想を抱きながら、僕は上空へと飛び立った。

景色がスローモーションで流れる。地面がゆっくりと近づいてくる。

そんな中、NHKの映像を思い出した。

そのまま、僕は地面に叩きつけられ……高校生という若い身でこの世を去った。

「おめでとうございます」

「死んだ人にいきなりおめでとうはないでしょう」

あの世というものは本当にあるらしい。幽霊になった僕の前にすぐに水先案内人らしい男が

「柳田です」

訂正、水先案内人らしい柳田さんが現れた。

30歳くらいの落ち着いた男性だ。

あの世でも仕事着にはスーツを使うらしい。クリーニングから取ってきたばかりのようなシワ一つないそれを着ている。笑顔を浮かべ友好を示しているがあまりに似合いすぎて、通信教材を売りに来た営業マンをどことなく彷彿とさせる。

「それで僕はどこに連れて行かれるんですか？そもそも天国とか地獄ってあるんですか？」

「意外と冷静なんですね。若いのに」

「そりゃあんな死に方をしたら、情けなさ過ぎて逆に冷静になりますよ」

好きな女性にフラれて、悲しみと怒りを爆発したら何の因果か墜落死。

アホだ、まごうことなくアホだ。

「つまらなくらいですか。死んですぐ天国か地獄かなんて普通すぎませんか」

「はっ？」

「私はそんなテンプレートに従うのは嫌なんですよ」

テンプレートのようなサラリーマンファッションのくせに何言ってるんだこの人は。

「だから第三の選択をあなたにプレゼントしましょう。もう一度言います。おめでとうございます」

「だから何がおめでとうなんですか？」

どうも会話のテンポが掴みにくい人だ。

「チャンスを与えましょう」

「チャンス？」

オウム返しに僕は質問した。

「そう！仏の顔は三度まで、と言いますし。あなたに生き返るチャンスを与えましょう」

…………… 生き返る？

『生き返る

1 いったん死にかけていたものが息を吹きかえす。蘇生する。
「死者が――る」

2 失われた活動力などが再び戻る。「庭の草木が雨で――る」

』

（ヤフー辞書より）

「生き、かえるうつつう！？そんな事出来るの！え、僕？カムバツク現世！？おほひよ〜」

僕は驚きと喜びをのまま、歡喜の奇声を上げてしまった。

「良い反応ですね。いや〜私が見込んだだけの人だけはある」

ハハハ、と笑いながら柳田さんは僕に握手を求めてきた。

このタイミングで握手はなぜだろう、と少し疑問に思っても生き返ることが出来る嬉しさに僕は躊躇いなく手を握った。

すると僕と柳田さんの握手した手が光り出した。

「なにこれ！？」

「離さないで。すぐに済みます」

柳田さんの言葉通り光はすぐに消えた。恐る恐る自分の手を確認する。

『4』

ハンコが押されたかのように手の平に数字がくつきり付いていた。

「それがチャンスの数です。ふふふ、よく分からない、という顔をしていますね」

右も左も分からない死後の世界で、わけの分からない事をされればこんな顔にもなるさ。

「詳しいことは教えてあげません」

にこやかな笑顔でスパルタな柳田さんだ。

「どうしてですか！？これじゃ何をすればいいか分かりません！」

「ええ、困りますよね。そんな困った表情が私は良いと思いますよ」
Sだ、この人は絶対Sだ。

「言葉で説明するより実際に体験した方が早いでしょう」
すつと柳田さんは固くした拳を僕の額の前まで出した。

「な、なにを」
「いつてらっしゃいませ」

バン、と綺麗な音が出るデコピンが決まった。

『チャレンジ 1回目』

「いたっ！」

後ずさりながら僕はたまらず額をさする。こんな威力のデコピンは初めてだ。

「何をするんですか」

抗議しようとして柳田さんに視線を戻す……あれ？

おかしい。柳田さんがいない。

代わりに柳田さんがいた眼前に見慣れた人物が立っていた。

「おい、どうした」

遠野秋彦。

物心付いた頃からの腐れ縁であり僕の大切な親友が、驚きの声を上げている。

「唐突に頭から後ろに吹っ飛んでビックリしたぞ。大丈夫か？」

長身で厳つい秋彦が、心底心配した目でこちらを見てくる。

秋彦はどんな時でも誰かのために親身になり頼りがいのある好漢である。周囲からの信頼も集めていて、親友だけと尊敬とほんの少しの嫉妬を持たずにはいられない人物だ。

「うん、大丈夫！ちょっと吹っ飛びたくなっただけだから」

秋彦は友情に熱い。それ故にいつもいらぬ心配をかけてしまっている。

僕はヒリヒリする額の痛みを我慢して、元氣溢れる声で答えた。

「吹っ飛ぶって……相変わらずおかしな奴だな。まあ、大事でないならそれにこした事はない。で、告白の準備は万端なのか？」

「告白？」

「はぐらかすなよ。放課後、松原さんに告白するんだろ。もう時間がないぞ」

放課後、松原さん、告白。

そのキーワード群が僕の記憶を呼び覚ます。

そうだ、僕は告白してフラれて死んだんだ。なのに、どうして秋彦と普通に話しているんだ？

ここは……学校の廊下だ。休み時間なのか、周りには数人の生徒が立ち話をしたり、歩いている。

いつもの光景。決してあの世じゃない。あれは夢だったのか……しかし、白昼夢にしてはリアルな体験だった。告白が失敗するところまでは悪夢として片付けられるが、柳田なる謎の人物まで登場するとは……

僕の想像力はこれほど逞しいのかな。

「うまくいきそうか？」

「ああ、え〜と。どうだろうな」

秋彦への返事をおざなりにしながら、僕は必死に現状を確認する。

あの体験が夢幻かどうか確認できるものはないだろうか。

「ん、なんだ。お前。手の平に何か書いているのか？」

秋彦の指摘ではつとなった。

手の平。柳田さんとの握手を思い出す。

そんな馬鹿な。あれは、あれは夢だろう。そうだろう！

だが、無常にも僕の手の平には確かに『4』という数字が付けられていた。

ちよつと考えてみよう。

手の平に『4』があると言う事は、僕は間違いなくあの世に行っ

ていたのだ。

そして、柳田さんの手でこの世に送り返された。ここまではいい。ただ、ここからが疑問の山だ。

僕は携帯で日付を見た。

10月10日、間違いなく僕が死んだ当日だ。

僕が死んだのは、この日の放課後。時間にすると、おそらく17時頃だと思う。

なのに。僕は教室の壁に掛けてある時計に目をやる。針は16時5分を指している。

おかしい。死んで生き返ったのは良いとして（いや、本当は良くないのだが）、どうして過去に飛ばされたのだろうか。

柳田さんは「生き返るチャンスを与える」と言っていた。だが、僕は生き返るための試練も何もなく、生き返っている。

試練を免除してくれた、などとは絶対に考えられない。別れ際にSっ気たつぷりの笑みをしていた柳田さんだ。

きつと何かある。もしかしたら過去に飛ばされた事も関係あるのかもしれない。

「ちょっとそこ、ちゃんと話を聞きなさいよ！」

勝気な声で現実に取り戻された。

しまった。今はHRの途中だった。

黒板前の壇上に秋彦同様幼い頃からの顔なじみが立っている。クラス委員の田所沙里だ。

「ごめん」

「謝らなくて良いから意見が欲しいわ」

沙里が胸まであるカールがかかった髪を指でくるめながら、挑発的な視線を送ってくる。

沙里という人間をもっとも良く表すポーズだ。

そういえばこのやり取り、記憶にある。

前回は告白の事で頭が一杯で沙里に注意されたっけ。たしかここで僕は言っただ。

「意見って何の？」

「あっきた。全然聞いてないの。演劇のことよ！」

そう、演劇だ。

来月に控えた文化祭に向けて、僕のクラスは演劇をすることになってた。

そして、今回のHRの議題は配役選び。

「あんた冴えないから、チヨイ役でもやりなさいよ」

沙里が綺麗に整えている眉を傾けて怒り続ける。あまりに記憶通りの反応で僕は、ついついにやけてしまった。それが油になった。記憶と違い、沙里の炎が大きくなる。

「笑うなんて良い度胸じゃない。何がおもしろいのか聞かせてくれるかしら、ええ！」

ドスが効いている。

普段の沙里は耳を塞ぎなくなる高周波で話す奴だが、怒りに比例して声を低くし他者を締め込ませる迫力を出す。長年の経験から文

字通り痛いほど僕は彼女のことを知っている。
だが、だからこそ対処法も知っているのだ。

「ごめんごめん、ちょっと想像したんだ」

「はあ、何を？」

「演劇だよ。沙里がヒロインやったらきつと素晴らしい出来になるんじゃないかって」

「えっ、そ、そうかしら」

今の一言で沙里の火は一気に鎮火に向かい始める。しめしめ。

「沙里って何というかオーラがあるんだよ。人を惹きつけて、視線を独り占めしちゃうような。沙里が舞台に立てば、それだけでアカデミー賞の主演女優賞だよ」

我ながら酷いお世辞である。

小学生だつて褒めすぎだと、顔をしかめてしまつたろう。しかし、そこは天下の沙里さん。

「そうか、あたしには女優の才能があつたのか」と信じてしまっている。少し可哀想な子だ。

「よし、それじゃあたしが人肌脱ごうかな」

沙里はすっかり乗り気になっている。

他のクラスメートたちも「俺も田所が良いと思つていたんだよ」とか「沙里ちゃん。応援するから頑張つて」とか勝手に言つて沙里をおだてる。

勝気な沙里がクラスに敵を作らないのは、こういう風に扱いやすいからだろう。

「うまく切り抜けたな」

隣の席の秋彦が声をかけてきた。

「長い付き合いだからね。沙里ブリーダーの第一人者の僕なら楽勝
楽勝」

「お前以外だったらそう都合良く進まんさ」

「そうかな、ちょっと口が達者ならイケるんじゃない？」

「やれやれ」

なぜか秋彦はため息をついた。精神年齢高めの秋彦の思考はいまいち掴めない。

「えー、みんなの多大な支持によってヒロインはあたしに決まりました。あたしがやるからには満員御礼、満足度ナンバー1の劇にすることを約束します。みんな、つべこべ言わずにあたしに付いて来なさい！」

何とも自信に溢れたスピーチだ。

周りから拍手が沸く。沙里はうんうんと頷きながらその音に聞き惚れている。やがて拍手が止み、沙里は言った。

「じゃあ、次は主役を決めます」

主役か……前は誰もなり手がなくてクジ引きで決まったんだよね。まあ、よほど運が悪くない限り、僕に当たることないだろう。そう思っていたら……

「主役と言っても、あたしの腹の内ではすでに決まっています。ねえ〜」

と猫なで声で沙里は僕の方を見る。

「え、僕？」驚いて自分を指差す。

「キリスト」

「いやいやイエスじゃないから！どうして僕なの」

沙里ジョークをすぐに理解し、慌てて立ち上がり抗議する。

記憶じゃ僕は役者すらなかったのに。主役に抜擢とはどういう見なんだ。

「だって、あたしをあんたが推薦したでしょ。お返しに今度はあたしがあんたを推薦するの。これでお互いトントン。みんな幸せ、めでたしめでたし」

「めでたくないよ、これっぽっちも！僕はチョイ役がお似合いだった自分で言っただじゃないか」

「今日も良い天気ね」

突然、会話を打ち切って沙里は窓の外を眺める。

「ちゃんと聞いてよ！」

「昔の人は言いました」

「えっ？」

「女心は秋の空」

「おいしいiiiiiiii」

結局、僕の言葉に沙里は耳を貸さなかった。なんてことだ。

「たいしたブリーダーぶりじゃないか」

秋彦が横で言う。皮肉は込められていないようだけど、僕のプライドはスタスタだ。

「放っておいて」

それにしても沙里、恐ろしい子！沙里を探求する道はまだまだ長く険しい。

仕方ない、演劇の話は置いておこう。それよりも懸案事項がある。

松原さんへの告白のことだ。
チラッと窓際に座る松原さんを見る。

沙里のようにクセのない整った黒髪が肩まで伸びている。

普通の女子がやればオカッパ頭でやばった印象を受ける所なのに、松原さんがやるとそれが美になる。一流の職人たちが長い年月培った技術の粋を集めて作り出したような、目や口や鼻が彼女という奇跡を構成している。

僕を含めた男たちは彼女を褒め称える以外の術を失ってしまうのだ。

松原さんにフラれて彼女への愛は薄れてしまうのでは、と思っていたがそんな事はまったくなかった。

彼女を見れば見るほど湧き上がる思い。誓う。僕の松原さんへの思いは今も変わらず燃えている。

放課後、もう一度彼女に告白しよう。今度はもっともって言葉を選んで頑張ってみよう。

HRが終わり、みんな三々五々帰っていく。僕もすぐに席を立つ。今朝、松原さんの下駄箱に『放課後、大事なお話があります。よろしかったら屋上まで来てください』という内容の手紙を送っていたのだ。

彼女を待たせるわけにはいかない。

「ちよつと待つて！」

教室の扉の前で沙里が仁王立ちして進行を妨げる。

「なんだよ。こっちは急いでいるんだ」

「時間は取らせないわよ。はいこれ」

渡されたのは厚い紙の束だった。一番上の紙に『ある愛の憧憬』と書かれている。

「これは？」

「劇の台本よ。あんた主演なんだからこの次までにきっちり台詞覚えてきなさいよね」

パラパラと台本をめくってみる。僕の役名は……ああ、これが。

「つて、歯が浮く台詞ばかりなんですけど」

「コテコテの恋愛物だからね。まあ覚悟を決めなさいよ」

そういえば台本作りは女子たちに任せたんだ。男が書いて演劇不可能な荒唐無稽の話になるよりはマシか、と思って黙認していたけど。これなら少しは口を出しておけば良かった。

「でさ、もし良かったら台詞合わせしない？」

「だから僕は用事があるって」

「その用事が終わってからでいいから」

沙里の様子がおかしい。いつもなら「用事なんて後にして付き合いなさいよ」と自分勝手な発言をするのに、今回は変に気を使って頼んでいる。

「うん、まあ早く終わったらね」

「じゃあ、教室で待つているから」

僕は台本を自分の机に置いた後、妙に機嫌が良さそうな沙里に見送られながら屋上へと急ぎ向かった。

屋上は無人だった。

夏は放課後であつても人の姿が絶えないこの場所だけど、秋も深まるこの時期では足を向ける人もいないようだ。だから、告白の場所に選んだだけだね。

教室に松原さんの姿がなかったので、先に行かれたかと思つたが何とか間に合つたようだ。

さて。僕は考える。

松原さんには好きな人がいると言つていた。もしその言葉が、僕の告白を断るための方便だったならまだ希望はある……と思う。

でも、もし本当に好きな人がいるならアウトだ。どうしようもない、現実は無常だ。

ガチャ。

重苦しく屋上のドアが開く。現れたのは、僕の待ち人だった。

「あの……お話とは何でしょうか」

ああ、松原さん。なんて透き通つた声なんだ。

もしこれで「実は私もあなたが好きです」なんて言われたら昇天して柳田さんとはご対面しそうだ。

「ごめん、急に呼び出しちゃって。聞いて欲しいことがあるんだ」

前より声を落ち着かせることが出来る。やはり人間経験が物を言うのか。

僕は一度、息を吸った。

よし、言つぞ。今度は噛まずに思いの丈を吐き出してやるぞ。

「松原さん！」

「は、はい」

しまった。ちよつと声が大き過ぎて、松原さんを驚かしてしまった。いかん、いかんですよ僕。紳士を装わなきゃ。

「僕はあなたが好きです。高校で初めてあなたを見た時からあなたの虜になつてしまいました。同じクラスになれた時は、心の底から嬉しかったです。確かに最初はあなたの綺麗な容姿に恋をしました。でも、いつもあなたを目で追いかけていくうちに、あなたの内面にも惹かれていきました。覚えていますか、春頃の話なんですけど……」

僕は如何に松原さんの事が好きなのか、どうして惚れたのか、松原さんの人間性の素晴らしさについてエピソードを交えながら熱弁した。

もう頑張った。本当に頑張った。

ひとしきり喋って僕は待ちに入った。次は松原さんのターンだ。

さあ、返答はいかに！

僕の視線は松原さんを離さない。吸い寄せられそうな唇に注目して、そこから出る言葉を待つ。

待つ？

そうだ。前は待つ暇もなく撃沈したのだ。それが今回は時間がある。松原さんが告白をどうするか考えてくれているのだ。もしかして、望みが

「ごめんなさい。お気持ちは嬉しいですが、私には好きな人がいるんです」

なかった。やっぱり望みなんてなかった。

「それじゃ」

記憶と同じように松原さんは踵を返して、屋上を去っていった。

木枯らしが僕の心まで入り込んで吹き荒れている。

結局、ダメだった。

全力で掴んだ結果は、前回の断りの言葉が遅延して「お気持ちは嬉しいですが」がプラスされただけだった。

脈なんてないのかな。

2回目の失恋は、激しい悲しみよりも空しい悲しみを僕に与えた。涙もしつとりと頬を伝っている。

ああ、もう何もする気になれない。沙里の約束を果たす気力もない。もうどうにでもなれ。

僕は寝転んで空を仰いだ。

夕方の空は青と赤と、やがて来る夜の黒で描かれていた。混沌とした色だ。まるで僕の心を表しているようでもある。空にまで嘲笑されてはたまらない。

僕は、目を閉じて風の音だけを聞くことにした。轟々と風が唸る。唸れ、唸れ。勝手に唸ってる。

しばらくそうしていた。すると変化が起きた。耳に入る風の音に別の音が混ざりだしたのだ。

なんだろう……プロペラ音？

目を開くと、空に点が付いていた。その点はどんどん大きくなっていく。

「う……うそでしょ」

飛行機だ。小型の自家用だろうか。それがこっちに向かって落ちてきている。機体から煙が昇っている。

「ちょっと待ってよ！」

急いで飛び起きた。とにかく屋上から脱出しなければ。

扉まで30メートル。扉からもっとも遠い所で寝そべったことが仇になった。

間に合え。

飛行機がどんどん近づく。まるで僕を狙った弾丸のように。風の音が聞こえない。プロペラ音しかない。

もう飛行機はすぐそこまで迫っている、対して扉はまだ距離があ

る。

そんな。間に合わない。どうして、こんな……

こんな死に方なんて墜落死よりもありえない。どうして！

前は飛行機なんて落ちてこなかっただろ。

批難を並べても飛行機は止まらない。

ドドオオオンー！

僕は何トンもある鉄の塊に押しつぶされ、高校生という若い身でこの世を去った。

「残念でしたね」

気が付くと柳田さんが立っていた。どうやらあの世に戻ってきたらしい。

「なんで飛行機なんですか」

僕はつい今しがた自分に起きた不幸が信じられなくて、柳田さんに質問した。

「それがあなたの運命だからです」

運が悪いなら分かるが、運命？

「あなたは死ぬ運命にあるのですよ。17時に」

「どうして、なんではつきりと時間が決まっているんですか！」

「因果律というものですよ。ほら、最初にあなたが屋上からダイブして死んだのが17時ですから……合点が付きませんか。では、改めて生き返るためのルールを教えましょう」

改めるも何も、ルールなんて1つも聞いていないぞ。

「あなたが生き返るための条件はシンプルでシングル。『告白を成功させる』それだけです。もし告白が失敗したり告白が間に合わず死のリミットである17時を迎えた場合、あなたは運命によっては必ず死にます」

必ず死ぬ。飛行機まで持ち出されれば信じないわけにはいかない。

「さらに気付いているかもしれませんが、あなたの手の平に書かれた数字はコンティニュー回数を示しています」

手の平を見る。『3』と書かれていた。

「回数が減ってる……」

「それが0になれば本当にあの世行きです。精々頑張ってください」

あと3回。そんな無理だ。心を込めた告白だって袖にされたのだ。どうすれば受け入れられるか検討もつかないのにチャンスが残り3回だなんて。

「おつと言いつける所でした。あなたが現世に戻るのは16時ジャスト。ですからリミットである17時までの1時間で告白を決めてください」

「1時間！無理無理無理無理無理！1時間でどうこう出来るほど、人の心は移ろいやすいよ」

最悪だ。絶望的な状況だ。

好きな人がいるかもしれない松原さんを、まったく脈がない僕がどうやって1時間のうちに振り向かせることが出来るのさ。そんな事可能なら今頃僕は、彼女作ってウハウハだよ。

「そこは創意工夫で。じゃあいつてらっしやい」

錯乱している僕に、柳田さんのデコピンを避けられるはずもなかった。

かくして、僕はまた現世へと送り飛ばされた。

序章「チャレンジ」1回目（後書き）

初の恋愛（？）小説です。

読みづらい所も多々あると思いますが、よろしくお願いします。

チャレンジ2回目

「無理だつて！」

人通りのある廊下で僕は絶叫した。

みんなが振り返って何事かとこちらを見るが、気にしていられない。

だつて、このままじゃ僕は死んでしまう。

「いきなりどうしたんだ」

前と同じく秋彦との会話中に戻ってきたようだ。

大声を上げた僕を見て、秋彦は目をパチクリさせている。

秋彦、ずっと昔から僕と一緒にの親友。

もし、このまま告白が成功しなかった場合、秋彦と今生の別れをすることになる。そう思うと、告白が失敗した時以上の悲しみが胸に来る。

「あきひこーー」

たまらず僕は秋彦に飛びついた。

「ああ、厚くて硬い胸板ですらサヨナラになると思うと、名残惜しくなる。不思議！」

「こら、人が見ているだろ」

秋彦の男臭が僕を急速冷凍する。確かに冷静になると、いくら命が潰えそうでも男と抱き合う趣味はない。

「うおえ〜」

「突然抱きついて、勝手に気持ち悪くなるなよ。挙動不審にも限度があるだろ」

「まったく」とため息をつきながら秋彦はたたずまいを直す。

いけない。悲しみに吞まれて錯乱を続けては本当に秋彦たちと別れることになってしまう。

「ちよつと廊下でなに騒いでんの」

廊下の向こうから沙里が歩いてくる。手にどこかで見た紙束を抱えて。

沙里。天然パーマを隠すためにカールにしたが、いまいち似合っていない沙里。その健気な頑張りすら見られなくなるかもしれない。そう思うと、告白が失敗した時以上の悲しみが胸に来る。と、いうことで。

「さりーっ」

「きゃー！なにしてんの、この痴漢！」

「ああ、よく刈り取った芝生のような胸と寸胴な体格でさえサヨナラになると思うと名残惜しくなる、不思議！」

「10秒あげる。遺言でも墓に刻む言葉でも好きなものを残さない。あんたの最期は、あたしの拳で飾ってあげる」

「おいやめろよ、2人とも。先生が睨んでいるぞ」

そんなこんなでHRになった。

沙里の機嫌はリーマンショック直後の経済のように下がり、クラスメートの誰もが場の空気を敏感に感じ取り私語1つ口にできなかった。

「役決めるわ。あたしの今日のラッキーナンバーは5なの。だから5列目のその男子、主役ね。ヒロインはその隣でいいや。あと…」

とんでもなくアバウトに役が決まってしまった。ごめん、みんな。

沙里の恐怖HRが穏便に過ぎるのを願いながら、僕の頭は松原さんの告白の事を考えていた。

真っ向勝負で勝てないことは分かった。策を練るしかない。では、策はどんな物が良いだろう。

方向性としては2パターンある。

僕の評価を上げるものと、松原さんの好きな人の評価を下げるものとだ。

だが、後者は好きな人が分からないので使えない。松原さん本人に「あなたの好きな人は誰ですか？」と聞いても答えてくれるはずがないし。

沙里あたりなら知っているかもしれないが、今の彼女に触るのは腹を空かせたライオンに触ることと同じだ。命の危機に瀕することは火を見るより明らか。

よって前者である僕の評価を上げる策を取ることにしよう。そうだな、使い古された手ではあるが、アレをやってみるか。

放課後。

僕はすぐに屋上に向かわず、秋彦を校舎裏に呼び出した。

「どうしたんだよ。その……松原さんに告白するんじゃないの
か」

秋彦はなぜかそわそわしている。しかし、今は気にしている暇はない。

「秋彦、お前に聞きたいことがある」

「改まってどうした」

「お前、松原さんのことが好きか？」

単刀直入に聞いた。この返答次第で作戦は破算となる。だけど、僕には自信があった。秋彦ならきっと僕の希望通りの返答をしてくれるはず。

「いや、俺には別に好きな人がいるから」

へえ。松原さんに気がないのは何となく分かっていたが、秋彦にも好きな人がいたとは気付かなかった。意外だ。

人気はあるものの浮いた噂の1つもない秋彦なのに。でも、考えてみれば秋彦だって思春期。気になる相手がいて当然かもしれないな。

「なんでそんな事を尋ねるんだ？」
もつともな質問である。

僕は勢い良く地面に両膝を付けて、頭を垂らした。土下座だ。

「なにやって「秋彦！」

秋彦の言葉を遮って僕は告げる。

「卑怯な頼みとは分かっている。お前がそういう事を嫌っているのも承知の上だ。それでも、それでも僕にはもうこれしかないんだ。一生のお願いだ。頼む、聞いてくれ！」

屋上の真ん中に松原さんが佇んでいる。秋彦に作戦の協力を頼んでいるうちに、先に着いたようだ。

屋上に続く階段。僕と秋彦はこっそり屋上に面した扉を少し開き、その隙間から松原さんを覗き見ている。

「作戦は言った通りに」

「分かった。演技は得意じゃないから期待するなよ」秋彦はドアを大きく開けて屋上へと足を踏み入れる。

「謝礼は弾むさ。僕が生き残ったらね」

秋彦の背中に僕は小さく言葉を投げた。

「あれっ、松原じゃん」

「えっ、遠野君？」

ドアの隙間から様子を伺う。松原さんの驚きが遠目からでも分かる。僕からの手紙で来てみれば、秋彦が登場した。それも驚きの1つだけど、もう1つ原因がある。

秋彦は女子に対してはとても紳士的だ。馴れ馴れしく話すことなど、昔なじみの沙里以外じゃありえない。ましてや深窓の令嬢である松原さんに向かって「松原」などと呼び捨てする奴じゃないのだ。この違和感が彼女を驚かせたのだろう。

「なんだ。暇しているのか、ちよつと付き合えよ」

自分で頼んだものの、なんというベタな台詞だろう。ナンパでいきなり「付き合えよ」と言うのは最悪の手だとナンパ指南サイトの人が言っていた。

まずは「あの……ちよつといいですか」と下手に出る立ち話で警戒心を解くのが先決、最初から本丸を狙っては相手が貝のように硬くなってしまうのだ。

案の定、松原さんは嫌々断わ

「ええ！私でよろしければ喜んで」

おいちよつと待て。

高圧的な秋彦のナンパ ↓ 嫌がる松原さん ↓ 颯爽と駆けつける僕 ↓ 秋彦撃破 ↓ 強い僕に松原さんメモメモ。

という古典的な手法を取り入れた作戦だったのに、早くも頓挫してしまいそうだ。

「ほ、本当に良いのか？」

秋彦が困っている。

先ほどのナンパな態度は胡散霧消し、台本から外れた松原さんの

反応にあたふたしている。

「はい。どこに行きましようか？」

「あ、あ……えと」

なんだこの展開は。なんだあのノリノリな松原さんの反応は。俺の告白を一刀のもとに切り伏せた松原さんは、どこへ行ってしまったんだ。

松原さんの顔が赤くなっている。夕日のせいだと思えないほど。

ま、まさかそういう事なのか。松原さんの好きな人って……秋彦だったのか！

どうする？こちらを振り向いた秋彦の顔はそう言っている。
どうしよう？そう伝わる顔で僕は応えた。

待てよ。冷静に考えれば、これはチャンスではないのか。
作戦の方向性として考えていたもう1つのパターンが使えるぞ。
すなわち『松原さんの好きな人の評価を落とす』。これが炸裂する
最高のシチュエーションじゃないか。

秋彦「お前の事なんてどうも思っていないよ」 ↓ 松原さん失恋
シヨック、秋彦への思いはガタ落ち ↓ 僕登場 ↓ 打ちひしが
る松原さんを優しくケア ↓ フォーリンラヴ！

これだ。

松原さんにしても自分に気のない秋彦を思い続けるのは酷だ。僕

が彼女とくっ付くことが誰にとってもハッピーで、すなわち地球平和に繋がるのだ。

僕は松原さんに気付かれないよう秋彦を手招きする。

「悪い、少し待っていてくれ」

秋彦が戻ってくる。

「困ったことになった」

秋彦が本当に参った顔をしている。松原さんに好意を寄せられているのになんて贅沢な奴なんだ。僕は親友に対して心から嫉妬の念を抱いた。

「秋彦、どうやら松原さんは君のことが……その、気に入っているみたいだ」

好きみたいだ、と言わないのは僕のプライドである。言葉にして認めたくないんだ。

「やっぱりそうなのか……俺、松原さんと付き合うなんて嫌だ」

「だったらフレ」

フレ。松原さんの中から秋彦という膿を取り除くため、容赦なく僅かな希望すら残さずフレ。

そうすれば、松原さんは僕との恋の道を躊躇いなく歩き出せるはずだ。

「きつい注文だな」

「よく考えるんだ、秋彦くん。君にも好きな人がいるんだろ。もし、その好きな人が実はまったく君に関心がなくて……でも、君はそれ

を知らずにずっと思い続ける……それってとても辛いことだろ。そんな悲しい事実なら早く清算して、新しい恋を見つけた方がきっと幸せさ」

「お前……すげー残酷な事言っんだな」

あれ、秋彦の目が潤んでいるみたいだ。僕はそんなに酷い事を口にしたのだろうか。

「行ってくる」

目頭を一度腕で拭って、秋彦はまた屋上へと消えていった。

僕は屋上の扉を少し開けて、松原さんの恋の顛末を見るか迷った。

いや、止めておこう。松原さんがフラれるシーンを見て、「よっしゃ」と思うのは人間として終わっている気がする。ここは、親友に任せよう。

やがて扉が開き、秋彦が姿を見せた。

「終わった。後は好きにしろよ」

「ありがとう。本当に」

階段を下りていく秋彦の姿はとても憔悴している。自分への好意を断るのは、僕が思うよりも精神に来るのかもしれない。

ごめんな秋彦。告白がうまくいったら飯おごるよ。

秋彦と示し合わせていたと勘繰られるのもいけないので、少し時間を置いて僕は屋上へと踏み入った。

松原さんが泣いていた。

声押し殺して泣いていた。

両手で顔を覆っているが、手の間から光る雫が夕日で光って見える。

予想していた光景だが、罪悪感がとめどなく胸中に溢れる。

「松原さん」

労わるように声をかける。

「遅れてごめん。聞いて欲しいことがあるんだ」

松原さんは一瞬、涙に濡れた目で僕を見た。けれど、すぐ後ろを向いて表情を見せないようにした。

僕は涙の理由を問わずに愛の言葉を吐く。

松原さんはただ泣き続けている。聞いてくれているのだろうか……

なんだか方法を間違えた気がしてきた。

失恋の人をケアして恋仲になるにしても、涙が乾かない失恋直後というのはタイミングとして危険な気がする。

僕が松原さんにフラれて屋上で失意のどん底にいた時。特に親し

くもない相手から告白されたらどう思うだろう。

好きになつて付き合う……いや無理だろう。

なんだこいつ、悲しみに浸る時間を邪魔するんじゃない、と敵意を剥き出しにするかもしれない。

松原さんが自暴自棄になつて僕と付き合う、そんな両者にとつても幸せじゃない結末しか自分の命を繋ぎとめられないことに、僕は軽く絶望した。

かくして僕の告白は終わった。

松原さんからの回答はない。

もうすぐ17時だ。こりや無理かな。半ば諦めかけた時、ついに松原さんがこちらを振り向いた。

「どうして……」

「えっ？」

「どうしてあなたなんですか？」

どう意味だろう。告白はイエスカノーで答えるものじゃないの。

「私、理解できません」

理解できないって……僕が松原さんに告白することがどうして理解の範疇外なんだろうか。

「それにどうしてあなたが私に告白しているのですか。私を馬鹿にして、そんなに楽しいのですか！」

大人しそうな松原さんが激昂している、初めて目の当たりにする姿に僕は……あ、こういう表情もまたグッとくるな。とか思いなが

ら、同時になぜ彼女が怒っているのか分からず困惑するという器用な感想を抱いた。

「帰ってください。いえ、私が出て行きます。もう話しかけないでください」

バーン！

大きな音を聞いた気がした。

きつと僕の胸が張り裂けた音だろう。医者もさじを投げる重症だ。過去2回を遥かに越える大失恋。松原さんは明らかな敵意を僕に持っていた。

なぜだ……僕は泣くことも忘れて、崩れ落ちた。

松原さんがいなくなった屋上。

僕は17時になるのを待ち焦がれていた。

もうこんな世界嫌だ。この胸の痛みは、松原さんの思いを踏みにじり、親友の秋彦を自分の欲望のために利用した罰なんだ。2人に合わせる顔がない。

リセットしよう。次からは絶対にこんな方法は使わない。

今度は……今度は……今度は、どうすれば良いんだろう。

正攻法で松原さんの気持ちを変えるなんて不可能だ。秋彦と僕、松原さんの天秤が傾くとしたら絶対に秋彦だ。僕がどうこうしようと1時間で、いや1年かけても傾きを変えることは出来ない。秋彦の良さを誰よりも、松原さんよりも知っている僕が言うんだから間違いない。

もっと……何か……まったく別の方法を考えなければならない。
僕の評価を上げるとか、秋彦の評価を下げるとか、そんな次元で
ない解決法を。

思考はそこまでだった。

とてつもない衝撃を受け、屋上の端まで吹っ飛ばされる。未経験
の高圧で高速で大量の水が僕を襲ったのだ。
何も考えられない。ただ、大量の水で埋まる視界の端に、穴の空
いた貯水タンクを見た気がした。

とうとう僕はフェンスの所まで流された。

ああ、今回はそういう死に方か。
僕の背にあるフェンスが傾く。最初の死の要因になった壊れたフ
ェンスだ。

背もたれを失った僕は、水に押し出され空中を舞った。

今度はあの古い映像は思い浮かべなかった。ただ、秋彦の物憂げ
な顔と松原さんの怒りと悲しみが混ざり合った表情が、頭をよぎっ
た。

そのまま、僕は地面に叩きつけられ……高校生という若い身でこの

世を去った。

「苦戦していますね」

おなじみの柳田さんだ。

「条件が厳し過ぎるんですよ。恋にはもっと時間が必要なんです」

死ぬ事に慣れた僕は、ショックを受けることもなくすぐに柳田さんとの会話に移行できるようになってきた。

「おやおや、1時間も与えているのに情けない物言いです」

「1時間しか、じゃないですか。そんな短い時間でどうしろと」

「焦ってまた親友や意中の人を傷つけたくないから、もっと時間が欲しいのですか」

「み、見てたの！」

一連の醜態を観察されていた……こんなに屈辱で恥ずかしいことはない。

「もちろん。あなたの奮闘ぶりは、あの世からちゃんと見守っていますよ、ふふふ。生き返りゲームは今までに何度か行ったことがあります、あなたほど見ているだけでおもしろ愉快的な人はいません。やはり私の目に狂いはなかった」

この人、絶対に友だちになりたくないタイプだ。

人の不幸を心から喜んでいます、そんな性格がにじみ出る笑みを浮かべている。

「そう怒らないで。これでも水先案内協会の良心と言われる私です。あなたが成功すると計算して、このようなルールを設けたんですよ」

ウソ吐け。良心を母親の子宮に置き忘れたような人のくせに。

ちゃんと計算して作ったルールなら柳田さんは小学校の算数からやり直すべきだ。

「柳田さんを優しいとは、とても思えませんよ。そのルールだって最初から説明してくれていたら、貴重なチャンスを1つ消費せず済んだのに」

「やってみた方が分かる」とチュートリアルを省略されたチャレンジ1回目は右も左も分からず何の対策も立てられなかった。そのせいで4回あったチャンス回数を浪費する結果になった。

「確かにルールを始めに知らせた方があなたにとっては有利だったと思います。しかし、しかしですね……」

「もしかして……なにか深い理由が？」

「そんなことをすれば……してしまえば……」

柳田さんは溜めに溜めて言った。

「あれ、僕は死んだはずなのに。あれは夢だったのかな……と、オロオロするあなたが見られません。観客としては貴重な笑いどころを失ってしまいます」

「うごおおおおおおおっ！」

暴力反対主義の僕だが、ここまで自分の命を弄ばれて黙っていられるわけがない。

柳田さんへの憎悪を拳に込めて放つ。

「おやおや」

だが、柳田さんは目前まで迫ったそれを片手で軽く受け止めた。くう、手を離そうとするが、柳田さんに握られてまったく動かせない。涼しい顔でなんて力だ。

「やめてくださいよ。あの世の人だってみんな痛覚を持っているんですよ。そうしないと地獄の意味がありませんし」

柳田さんは水先案内人よりも地獄の針の山や灼熱沼の監視員をしていた方が似合うと思う。

「あなたが怒るのも分かります。そうですね、罪滅ぼしに生き返るためのヒントを与えましょう」

柳田さんが僕の手を解放する。また殴りにかかるうと思うが、ヒントという言葉が気になるのでとりあえず拳を収める。

「ヒントは、生き返る条件が『告白を成功させる』であることです」「えっ？そんな事分かりきったことじゃないですか」

その成功条件に向かって奮闘し敗れ、僕は今ここにいるんだ。

「ふふふ」

また気持ち悪い笑いだ。迷路の中の僕を外から眺めて楽しんでいるようだ。

「このヒントの意味に気付かなければ、私は水先案内人としての仕事を全うするだけです」

僕は汗ばんだ手の平を見た。『2』が刻まれている。ゲームセツトは近い。

考えなければ……ヒントの意味、もしかしたらそれが『僕の評価

を上げるとか、秋彦の評価を下げるとか、そんな次元でない解決法』に繋がるのかもしれない。」

「では、そろそろ。次のチャレンジに参りましょう」

柳田さんがデコピンの体制になる。

「もう少し考える時間が欲しいんですけど」

「あげません」

現世に戻ったら時間との勝負だ、対策を練って行きたい。と、思
つて言つた申し出をSな柳田さんが許すはずもなかった。

「せめてデコピン以外の方法はないんですか。あれを毎回くらの
は……」

「他にも方法はありますよ」

「じゃあ、それを」

「拒否します。これが私のストレス解消に最適ですから」

このサド！と、叫ぶ前に僕はデコピンを受けて……

また、生き返るための奮闘を始めた。

チャレンジ3回目 前編

廊下、秋彦との会話中に戻ってきた。

今回はデコピンの痛みを堪え、何とか秋彦に感付かれずに済んだ。

「告白はうまくいきそうか？」

「いや絶対に無理だ」

過去3回撃沈した実績を胸に僕は自信満々に答えた。

「おいおい」

「所詮不可能な話なんだよ。秋彦のように優秀でもなく周りから信頼もされていない僕に、松原さんが振り向いてくれるわけないんだ」
「自分を卑下するな。確かにお前はドジで情けない所もある。けど、良い所だっただくさん持っているぞ」

秋彦が弱気な僕を叱咤激励してくれる。熱い友情を感じずにはいられない。なんて良い奴なんだ。

でも、秋彦。ダメなんだよ。

松原さんはそんな良い奴の君を好きなんだ。僕に入り込む隙はない。
い。

「ちょっと、もう休み時間は終わり、HR始めるわよ。教室に戻んなさい」

チャレンジ2回目と同様、紙束を抱えた沙里がやって来た。
もう時間か。

HRの後はすぐ放課後、告白タイムだ。このままじゃこれまでと同じくフラれてあの世行き。

何か行動を起こさないと、何か！

「何持ってたんだ？」秋彦が興味を示す。

「台本よ。役者の分、刷ってきたの」

「大変そうだな、持ってたやる」

「サンキュ秋彦。いや、か弱いあたしには台本は重くってね」

沙里から紙束が秋彦に渡される。

あの紙束は台本だったのか。台本……台本ね……

チャレンジ1回目のことを思い出す。

沙里の陰謀で主役を押し付けられた僕は、嫌々台本をめくったんだ。あの、さとうきびジュースのように甘ったるい恋愛物を……れんあい……告白……ん、もしかしたら。

「沙里！」

「きゃ、なによ大声出して」

沙里に詰め寄る。

「その劇に告白シーンはあるか！その、主人公がヒロインに告白するシーン！」

「あるにはあるけど、何？あんた劇に興味あったっけ？」

「告白あるんだな！もちろん成功するよな。主人公がフラれて屋上からダイブなんて話じゃないんだな」

「はあ？屋上？ダイブ？どこの馬鹿な話よ」

ここの馬鹿の話だ。

「成功するわよ。でなきゃハッピーエンドにならないでしょ」

「おっしゃー！ー！」

期待通り過ぎて思わず僕はガッツポーズを取ってしまった。

これだよ、この方法なら告白を成功させることが出来る。

つまりだ。

僕を主人公、松原さんをヒロインにしてしまえばいいんだ。そうすれば演劇の練習と、かこつけて告白が出来る。

僕が「好きだ」と言つて、松原さんが台本通りに「私もよ」と言えば、それで『告白を成功させる』という条件はクリアーされるのではないだろうか。松原さんとしては台本の台詞を喋るだけで、現実には僕の彼女になってくれるわけではない。

それは悲しいことだが、今は死の危機に面している現状を打破することが先決だ。生き残ることが出来れば、これからまた彼女にアタックしていける。もしかしたら演劇の練習を共にすることで、愛が芽生えるかもしれないしな。

考えれば、考えるほど良い作戦だ。グフフフ……

「なあお前どうしたんよ。急に大声出したかと思えば、にやけやがつて」

「普段から可哀想な奴とは思っていたけど、ここまで重症だったの！ 一つの間にか秋彦と沙里が僕と距離を置いて、訝しげな視線を送ってくる。しまった、考えに没頭しすぎた。だが、恥ずかしがっている場合じゃない。」

「僕、主役やるよ！」

高々と宣言する。

「おどろき。どっという風の吹き回しよ」

「H A H A H A、主役と言えば僕しかないじゃないか！1 + 1」
2より常識的なことさ」

「H R休んでいいわよ。保健室に行って頭のネジを巻いてもらいなさい」

「僕は正常だ。それより沙里くん。君に頼みたい重要な任務があるのだ」

フイーバーしていた僕は一転、声のトーンを下げて重厚な口調で言った。

「また下らないこと言ったら病院へ行かせるわよ」

「実に真剣なことだ。次のH R……ヒロインとして、是非とも推薦したい人がいる」

「えっ、もしかしてそれって……」

急に視線を忙しくあちこちに向けながら口ごもる沙里。顔を赤らめながら慌てている。

どうしたんだろう。

「ああ、なるほどな」

頭が切れる秋彦はもう僕が何をしたいか察したようだ。

そう、僕は。

「松原さんをヒロインに推薦してくれ。クラス委員の沙里が頼めば、きつと大丈夫だよな」

沙里は昔から喜怒哀楽の激しい女の子だった。山の天気のようにコロコロ変わる機嫌に、苦労したことは数えるのが馬鹿らしいほどある。

そんな沙里の顔だけど、何かを期待する仕草から、鳩が豆鉄砲くらった顔になり、次第に無表情になり、一瞬悲しみの色を浮かべ、最終的によく見る阿修羅の形相になる急速5段階変化を見るのは初

めての経験だった。

「なんで？」

出た！沙里さんのドス声、相変わらず身体の芯まで響いて恐怖心を植えつけるううう。

「そりゃあ聞くのが野暮つてもんでさあ、沙里のアネゴ！」

僕は無理して江戸っ子風に答えた、いや特に意味はない。

「……………」

沙里が無言で僕を睨みつける。長年の付き合いである僕だから尿意を催す程度で済むが、ビギナーの方はトラウマになるほどの眼光だ。なぜに怒っているのか検討も付かない。

こりゃ、おだててどうこう出来るレベルじゃないな、そう判断した僕は「は、ははは」と笑みで友好の意を示し、嵐が過ぎるのを待つ。

「……………ふん」

拳の5発は覚悟したが、意外なことに沙里は無暴力で教室へ入って行った。だが、その反応が逆に沙里の胸中の荒れ模様を表しているようで、僕は素直に安堵することが出来なかった。

「なに怒っているんだよ、あいつ」

「今のはお前が悪いぞ」

秋彦が注意してくる。秋彦には沙里の気持ちが分かるのか。沙里ブリーダーとして自信があつた僕だが、秋彦の方が上手なようである。

それにしてもあの様子じゃ僕の願いは聞き遂げられないかもしれない。沙里以外で松原さんを推薦してくれる人は……秋彦か。うん、秋彦の頼みなら松原さんはきつと受けてくれる。

「と、いうことで秋彦よ」

「俺が松原さんを推薦しろと」

「話が早くて助かるよ。頼みます、このとおりです」

正月の賽銭箱の前でするお辞儀を敢行する。秋彦は頭をかきながら非常に面倒臭そうな顔をする。

「やってもいいが、頼んでヒロインなんて大役をやってくれる人なのか。あの大人しそうな松原さんが」

「普通の人じゃダメだ。だが、お前ならイケル！」

「何を根拠に……はあゝ分かったよ、まったく。貸しだからな」

よし、台詞で告白作戦の目処が立ったぞ。

HR。すでに3回目となるHRだが、毎回展開が変わるので油断は出来ない。特に今回は僕の思惑で流れを操作しなければならない。

「じゃあ主役決め……一応聞くけど、立候補者いる？」

チャレンジ2回目と同様、いやそれ以上に黒板の前で司会をしている沙里の機嫌が悪い。

でも、ビビッていられない。命掛かっているんだ、沙里なんかに恐れをなしてたまるか。そんな気概で

「はい！」

僕は天を突き刺さんとする挙手をした。

「おゝゝ！」周りから驚嘆の声が沸く。主役なんて誰もやりたがらない、それがみんなの予想だったんだろう。それに反する僕の行動は、「おいおい大丈夫か、大根役者になるなよ」と少々揶揄の的になったが、反対意見はなく受け入れられた。

「じゃあ主役が決まったので、次はヒロイン決めね。立候補者はお手上げ」

いるわけない。過去3回のHRがそれを証明している。後はタイミングを見計らって「じゃあ、俺が松原さんを推薦します」と秋彦が口にすれば作戦は成功したも同然だ。

だが。

すっ……手が上がった。

「おっ……！」

僕の時と同じくみんなの驚く声がある。その声の中に僕は含まれていない。僕は驚き過ぎて、金魚のように口をパクパクしていたからだ。

「あ……あ、なんで」

ようやく声が出た。動揺が治まり、怒りが湧いてきた。

こちらら命張った作戦中なのだ。どうして邪魔をする。お前は僕を殺したいのか。な、なんで。どうして過去と同じく黙っていられないんだ。なあ……

「沙里！」

僕は壇上で拳手している沙里に向けて怒鳴った。

「立候補者はあたし1人ね。ってことでヒロインはあたしで決まり！」

敵意を放つ僕の存在などどこ吹く風。沙里は強気な態度で場を締め
る。

「ちょっと待ってよ。話が違う。どうして沙里が立候補するのさ」
僕の頼みを断って松原さんを推薦しなかったばかりか、自らヒロイ
ンに名乗り出るなんて。沙里は僕に恨みでもあるのか。それほど沙
里の怒りは深いのか。

「あたしだってヒロインになってスポットライトに当たりたい、と
思うくらいの女心は持っているの。そんな不満そうな顔しないで仲
良くやりましょ。主役さん」

冷徹な態度の中で、沙里は少し嬉しそうな顔をした。ますます沙里
の考えていることが分からず、僕は途方に暮れた。

HRが終わってしまった。立候補者が出てしまつては推薦など不
要だ。

沙里の立候補はみんなから高い賛同を得た。なんだかんだでクラ
ス委員をこなす沙里は、僕とは比べ物にならない人望を持っている。
こんな状況でなければ僕だって「ワンマンショーにするんじゃない
ぞ」とからかいながら沙里のヒロイン就任に拍手を捧げただろう。

ここで沙里は嫌だ、松原さんが良い。そう駄々をこねたら最後、
全員から軽蔑されクラスでの居場所を失うのは目に見えて分かる。
唯一の反対者である僕は発言すること叶わず、絶望に打ちひしがら
れた。

「顔、上げなさいよ」

頭の上から声が降ってきた。椅子に座って頭を垂らし机を眺めるだけだった僕は、久方ぶりに視線を上昇させる。

机を挟んで沙里が立っていた。

気付けば教室は随分閑散としていた。みんな帰宅したり部活に向かったのだろう。秋彦の姿もない。どのくらい僕は呆然としていたのかな。

「ごめんなさい、なんて言わないわよ」

そう言う沙里の表情は暗く、若干の後ろめたさを放っていた。少しは悪かったと思っているのだろう。だが、そうだとしても許す気には絶対になれないが。

「いいじゃない、あたしで。何が不満なのよ」

不満さ、お前の勝手に僕は死ぬんだ。

「男がいつまでもウジウジしない！さあ、練習しましょう」

バサツ、と机に台本が置かれた。『ある愛の憧憬』、僕の命を救う頼みの綱だった物だ。こいつを松原さん読み合わせすれば、僕は生き残ることが出来るかもしれないのに。

沙里、お前のせいだ。

「ほら１ページ目から」

「嫌だ、読むなら１人で読めよ」

「それじゃ読み合わせ出来ないでしょ」

「うるさいな！僕じゃなくても読み合わせ出来るだろ。秋彦にでも言わせ……あつ」

あつ、僕は馬鹿だ。

そうだよ、読み合わせするのに役柄なんてどうでもいい。松原さんをヒロインにする必要はなかった。大切なのは松原さんと台詞合わせをして、『告白を成功させる』シチュエーションを成立させること。松原さんがヒロインだろうが、役なしだろうが関係ないんだ。

僕は机の台本を握り締め、そして……

「ちょっと！」

素早く手を伸ばし沙里の手にあつたもう1冊を奪い取った。

「か、返しなさいよ」

掴みかかろうとする沙里を振り切り、そのまま全速力で教室を後にする。

背後から沙里が何か言っているが、当然足を止めることはしない。時間がない。もう17時は近い。

屋上で松原さんは待っていてくれるだろうか。机で呆然としている僕を見て、屋上にすら向かわなかった可能性もある。

ああ、僕はなんて要領が悪いんだろう。自分で自分を嫌いになりながら走った。

屋上への階段を二段飛ばして駆け上がる。

目の前にドア。

頼む、いてくれ。

僕はノブを回して、屋上に出た。

チャレンジ3回目 後編

風になびく髪を抑えながら、目当ての人物は夕日で照らされた屋上に立っていた。

赤く染まる空、幾重もの層をなして轟々と流れる雲、その下で佇む美女。まるで絵画の1枚として美術館に飾られてもおかしくない光景だ。

過去のチャレンジでも見た光景なのに、どうしても今回は特段に惹かれるものがある。きっと僕が生き残る勝算を持っていて、物事をポジティブに感じる余裕があるからだろっ。

「ご、ごめん。待たせちゃって」息を整えながら謝罪する。

「いいです。用件は何ですか？」

早く話を切り上げたいのしろっ、松原さんの口調は簡潔だ。だが、時間がない僕としてはありがたい。

「これを一緒に読んでよ」

台本を片方差し出す。

「えっ？」

そりゃ驚くよね。放課後の屋上に異性から呼び出されれば、十中八九色恋ごとだと思っものだ。松原さんだってその覚悟でやって来たのしろっ。

「さっきのHRで話していた劇の台本。松原さんにヒロインの台詞を言っ欲しいんだ」

「ヒロインは沙里ちゃんに決まったじやないですか。2人で読み合わせした方が良く思っます」

「分かつてる。けど、僕は松原さんと読み合わせしたいんだ。お願い

い！１回だけでいいから」

「……嫌です」

唐突であるし、気味が悪い頼みごとだ。まあ、普通の人なら受け入れないだろうね。けど、何としてもやってもらう。僕には切り札があるんだ。

「遠野秋彦」

親友の名前を出す。松原さんが固まる。

「好きなんでしょ、秋彦のこと」

「そ、そんな……どうして知っているの？」

秋彦に知られたら殴られたって文句は言えないな。自分で最低の事をしているのは承知の上だ。

正直この方法を使えば、松原さんと恋人関係になることは未来永劫ない。

けど……僕は松原さんより命を取る判断をした。なり振り構ってられる余裕なんてない。

「秋彦に対する態度を見れば一目瞭然だよ。それでさ、秋彦は僕の親友なんだ。僕ならうまく秋彦との仲を取りもってあげるよ」

「本当ですか、ウソじゃないですよね」

あっさりと食いついてきた。よほど秋彦のことが好きなんだろう。自分の思惑通りに話が進むのに、僕の心は傷つく。脈がないことを再認識してしまった。

「もちろんだよ。松原さんの良い噂をそれとなく秋彦に言い続けよ

うか。休日の秋彦の予定をリークしても良いさ。たまたま町で会ったならお茶くらい一緒に出来るかもしれないよ」

稀代のペテン師になった気分だ。もし生き返るのに失敗したら、柳田さんに地獄へ送られるかもしれない。僕の自己嫌悪が激しくなるしかし、それだけの成果はあるようにで

「分かりました。1度だけですよ」

ついに松原さんを動かすことに成功した。

屋上の真ん中で、2メートルほど離れて松原さんと対面した。

「1ページ目からします？」

「ちよっと待ってね」

時間がないので、告白シーンだけやろう。僕はパラパラと台本をめぐって、甘い話のピークを探す。

ん、これかな。

「17ページだけでいいよ。僕の『月が綺麗だね』から」

「ああ、ここですね……ああ」

松原さんは17ページがまるまる告白シーンだと気付き、『ああ』とこぼした。現実じゃ決して言われないからって演劇を使って私に告白させる気なの、この変態。目がそう言っている。

あれ、おかしいな。生き残るためにやっているのに、死にたくなってきたぞ。

ともかく読み合わせが始まった。

主人公「月が綺麗だね」

ヒロイン「そうね、吸い込まれそうなくらい素敵」

ちよ、松原さんったら超棒読みだ。やる気0だ。

主人公「百万ドルの夜景と、煌びやかな夜空。どちらも美しい。でもね、僕はそれ以上に美しいものを知っているんだ」
うおおお、なんてベタな台詞。歯が浮く。

ヒロイン「なにかしら」

主人公「君だよ」死ぬ！恥ずかしくて死ぬ！

ヒロイン「まあ」

主人公「冗談じゃないよ。こんな美しい君は罪だ。僕が逮捕しなきゃいけない。ずっと僕の隣にいてもらう」

ヒロイン「それって……」

主人公「ああ、君が好きだ。僕と一緒になってくれ」

言った！言ったぞ。さあ、後はヒロインの承諾する台詞を！

ヒロイン「ふふふ、情熱的ね。私の答えは……」

バン！

「見つけたー！ー！」

ヒロインの台詞を中断させた轟音は、屋上の扉が蹴り開けられた音。

続いての野獣のような叫びは憤怒の追跡者・沙里のものだ。神様は僕が嫌いなのだろうか。僕の人生を平々凡々と流してはくれないのだろうか。

「さ、沙里ちゃん」

松原さんが狼を前にした子ヤギのように怯えている。僕も子ヤギだ、メエーのっしのっしと沙里が僕らの方に歩いてくる。超怖い。

「ねえ、松原さん」

「な、なんでしよう」

「台本返して下さる？」

「は、はい！どうぞ」

ああ、せっかくの台本が。

松原さんはおっかなびっくり沙里に近づき、台本を差し出した。沙里はそれを目にも留まらぬ早さで手中に収める。

「ち、違うのよ。沙里ちゃん。私は」

「あの馬鹿の誘いで来たんでしょ。ごめんね迷惑かけて。あたしからっしかり言い聞かせておくから帰っていいわよ」

「あ、ありがとう。じゃあ私はこれで」

松原さんが全速力で出口へ走っていく。この空間に長居するのは危険だと判断したのだろう。その判断は的確だよ、松原さん。君は長生きするタイプだね。

「あたしと読み合わせをしなくて、どうして松原さんと読み合わせていたの……」

対して僕は長生き出来ないタイプだね。今まさに命の炎が燃え尽きようとしている。

「これにはエベレストより高く、日本海溝より深い理由があるんだ」
「あたしの怒りは火星のオリンポス山より高く、マリアナ海溝より深いのよ」

ダメだ。まったく太刀打ち出来ない。

「松原さんがそんなに良いの！ やっぱり顔なの！」

沙里の手が僕の襟を掴み、締め上げる。

「どうしてあたしじゃいけないの。言ってみなさいよ！ ほら、ほら、ほら！」

どんどん締めが強くなっていく。死ぬ気で沙里の手を引き離そうとするが、微動だにしない。化け物め……

「ぐおおおっ」

自殺で一番痛いのは首吊り、って前に聞いたけど本当だ。首を締め上げられ、息が出来ないことがこれほど苦痛とは。

あつ、でもだんだん何も感じなくなってきたぞ。血液の流れが遮断され、すーと意識が遠のく。

もしかして今回の死因は、幼馴染の女の子による絞殺ですか。これまたスキヤンダラスな死に方だな……おっ、川の向こうで柳田さ

んが手を振っているぞ。おゝい。

そんなあの世とこの世の境目にいた僕に、苦痛がぶり返してきた。

「ごほつごほつ……ああ、うえ……はあはあ」

膝を付き、必死で酸素を取り込む。沙里が手を離してくれたのか。17時になる前に臨死体験をしてしまった。

「練習、するわよ」有無を言わせない迫力の声が、倒れた僕の上から降りかかる。

「い、いえっさー」

僕の中からNoという言葉が滅亡した。これからは軍隊のブートキヤンプよろしく肯定以外の返事は存在しない世界だ。

やがて呼吸が整った。僕は首をさすりながら、えっちらおっちら立ち上がる。

「台本を」

「も、持ちました」

「1ページ目のあなたの台詞から……はい、読んで」

「……………」

「読んで」

「……………」

「何しているの、読みなさいよ」

「……………ねえ、僕から離れて」

どうやら17時になったようだ。あの世からのお迎えが来てしまった。

ヘリコプター落下や貯水タンク破裂、とありえない現象によって死に続ける僕。今回も洩れずにありえない死に様になりそうだ。

「どこ見ているのよ……っ」

僕の視線を追った沙里が絶句する。屋上の扉の前に僕をあの世に導く使者が立っていた。

平和な町の、平和な学校、その屋上に現れた使者は壊滅的に場違いだった。

「ガアオオオオ」

ウソみたいだろ、ライオンなんだよ。

動物園かテレビの中でしかお目にかかれない百獣の王が、松原さんが開けっ放して出て行った扉からこっちに向けてじりじりと近づいてきているんだ。

どうやって動物園から逃げ出したの？どうやって学校まで捕獲されずに来れたの？どうやって屋上までたどり着いたの？

疑問は湯水のように湧き上がる。分かるのは、死の運命はとんでもなく理不尽なことだけ。

先ほど松原さんの髪が風になびくのを見た僕は興奮した、現在黄色のライオンのたてがみが風になびくのを見た僕はまた興奮している。興奮のベクトルはまったく違うが。

動物園にて檻の中にいるライオンを「かわいいな。寝そべってい

る姿なんて猫みたいだ」と評した自分を殴りたい。どこがかわいんだ。恐怖が具現化したみたいじゃないか。ライオンとの距離が近づくほど、その隆々とした体格、獲物を前に舌なめずりでもしているかのような息遣い、夕日に照らされすでに血に塗れたような牙が認識出来るようになった。漏らしていいですか。

隣で沙里が震えている。彼女を巻き込んではいけない。僕はいんだ、まだ生き返るチャンスがあるから。でも、沙里は死んだらそれまで。彼女をライオンから遠ざけるくらいの男気を見せて、今回のチャレンジの幕引きにしよう。

「僕がライオンの気を引く。沙里はそのうちに扉まで走って」

「ば、馬鹿言わないで。あんた死ぬわよ、死んじゃうわ」

「大丈夫、僕を信じて。いいね」

「よ、良くない、絶対無理よ。待って」

待たずに僕は横へと走り出した。

急に動いた僕をライオンは的に選んだようだ。サバンナのハンターとして相応しい跳躍で僕との距離を一気に詰めてくる。

ああ死んだな、こりゃ。と諦める時間さえ与えてもらえず、僕はライオンに押し倒された。200キロの巨体に押し潰され、身動き1つ取れない。押さえつけるライオンの手、その爪が制服を破って胸まで突き刺さる。泣けるほど痛い。

獰猛な顔が目の前にある。涎なのか唾液がぼたぼた落ちて顔にかかる。

「グウオオオオ」

いただきます、でも言ったのかライオンは一度唸り、僕の首もとを狙って牙を立てた。

ちくしょう、やるなら一気にやってくれ。即死で頼むよ、これ以

上の痛みは勘弁だ。

「うわああああ」

僕の悲鳴じゃない。沙里の叫びだ。
唯一動かせる首で沙里の方を見る。

沙里が泣きながら上履きを手にし振りかぶって……っておい止める。そんなことしたら！

沙里は一流の投手になれるかもしれない。こんな危機的状況で、上履きという投げるに適さない物を、10メートルほど距離のあったライオンに見事1発で当てたのだから。

獲物が沙里に変わった。身体が楽になる。ライオンが僕の上からどいたのだ。

行かせていけない。腕を伸ばし足でも尻尾でも何でもいいから掴もうとする。しかし、雷が地を這うように移動するものに対し、僕の手は空を切るしかなかった。沙里が絶叫する。

「きゃあああああああ」

「や、やめろおおお！」

全身の悲鳴に耐え、急いで起き上がる。沙里は！

ライオンが今まさに沙里に覆いかぶさったところだった。沙里の細い首を骨ごと噛み切ろうと牙が迫る。沙里は咄嗟にそれを腕で防ぎ、

「ああああああああああ」

首の代わりに腕を犠牲にした。牙が深々と刺さる。白い制服の裾があつという間に朱に染まる。

よせ、死ぬのは僕だけで十分だ。沙里を、沙里を殺させるものか。僕はライオン目掛けて地を蹴った、

「うおおおおおお！！」

沙里の腕を残酷なまでに弄ぶその憎たらしい顔に目掛けて渾身の蹴りを放つ。ボクシングで言えばヘビー級ボクサーへのストロー級の攻撃だ。ダメージはない。

ただライオンの機嫌を損なうことには成功した。ライオンは血まみれの沙里の手を離し、こちらを向く。

相手が体制を整える前に僕は反転し走った。あのフェンス目掛けて。

ライオンを倒すにはあの方法しかない。瞬間的にそう判断したのだ。

これまでに2度僕の命を奪った壊れかけのフェンス、その前までライオンを移動できれば。

背後の気配が近づく。ちゃんと追いかけてきている。沙里の様子、ライオンの様子。気になるところだが、振り返る刹那すらおしい。

コンマ1が命取りだ。

距離にして十数メートル、時にして一瞬。それが僕とライオンの追いかっけっこで……その結果は僅差だった。

フェンスが間近に迫る。

まずい、ライオンをフェンスまで誘うことしか考えていなかった。急停止しなければそのままフェンスに激突して、僕だけが真っ逆さまだ。

と、止まらない。やばい、という心配はすぐに杞憂となった。フェンスにたどり着くと同時に、爆風のような暴力が僕を飛ばした。僕とライオンは一緒にフェンスにぶつかった。フェンスが僕らを飲み込みながら傾いていく。予想通り！

「！」

その時、沙里の声がした。日本語になっていない振り絞った壮絶な声が耳に入った。

なんだ、元気そうじゃないか。あれなら死ぬことはないだろう。僕は安堵しながら重力に引かれ……

ライオンと共に仲良く地面に叩きつけられ……高校生という若い身でこの世を去った。

「大したものです。見直しましたよ」

ぱちぱちと拍手しながら柳田さんが迎えてくれた。

「けど、今回も失敗して……後1回しかチャンスないんですよ」

「ええ、泣いても笑っても後1回です。どうです、自信はありますか？」

3回目のチャレンジは良い所まで行っただけと思う。沙里の邪魔というイレギュラーがなければ今頃ライオンに襲われることもなく家路に着いていたはずだ。

「はい、次はバツチリ決めます」

「沙里さんを守った勇氣に敬意を払いアドバイスしますが、台本の読み合わせは台本の読み合わせでしかありません。『告白を成功させる』という条件には当てはまらないですよ」

「マジで！」

こゝろ、ここまで来てそりゃないよ。じゃあ、3回目のチャレンジはすべて無駄だったのか。肩がガクツと下がる。チャレンジ回数は1つしか残っていないのに、生き返る糸口がまったく分からない。

「ヒントをきちんと考えましたか？」

ヒント、って成功条件を確認しただけじゃないか。『告白を成功させる』、これに何が隠されているって言うんだ。

「あなたの好きな人は誰ですか？」

「唐突に何を」

「答えてください」

柳田さんの様子が変わる。人に苦痛を与えるのを生業に生きているSだと思っていたのに……この柳田さんと話していると、口調が違うものの秋彦と話している錯覚に陥る。すなわち僕のことを真に思いやり、助けようとしている人と共にいる感じだ。

僕は質問を突っぱねず、素直に返答することにした。

「……そりゃ松原さんです」

「今、考えましたよね。あなた、本当に松原さんが好きなのですか」
「もちろん「ウソです！」」

言葉を切断された。

これまでに見たことのない毅然とした態度で柳田さんは、僕の心中を攻める。

「確かに初めて会った時のあなたは松原さんを好きだった。しかし、チャレンジを繰り返すうちにその想いは薄れていったのではないですか。あれだけ素っ気無い態度を取られれば無理ありません」

「な、何を証拠に」

「3回目のチャレンジ。あなたは秋彦さんをダシにして、松原さんと台本の台詞合わせを行うことに成功した。あなただって気付いたはずです。それでは松原さんに一生軽蔑される、関係の修復は不可能だと」

「でも、それは命を繋ぎとめるためです。たしかに松原さんのことは好きですが……自分の命には代えられません」

恋や愛が地球より重いなんて真面目な顔で言う人もいるが、僕は命第一主義なんだ。

「つまりは松原さんに対する気持ちなど、その程度なんですよ。私はこれまで様々な人の水先案内を行いました、愛する人のために命を投げ出す人は珍しくありませんでしたよ」

僕の気持ちは軽いのか……すぐに言い返さず、こうやって考えている時点で認めてしまっているのかもしれない。

「諦めましょう。『松原さんへの告白を成功させる』など」

「なっ！僕に本当に死ね、と言うんですか！」

「いい加減気付きなさい。このヒントに、そしてご自分の気持ちに」
柳田さんが僕の肩に手を置き、真剣な目で見つめてくる。

気付く……そうだ。今、柳田さんは『松原さんへの告白を成功させる』と言った。成功条件は『告白を成功させる』こと。似ているようでこの2つは大きく違う。柳田さんの提示した条件に、告白対象は指定されていない。

つまり、告白を成功させるべき相手は、松原さんでなくても良い。そういう事なのか……

「でも、僕には松原さん以外に告白する相手なんて……それに告白を受け入れてくれる人なんて……」

「いるじゃないですか。あなたのすぐ近くに」

なぜか、沙里の顔が僕の脳裏に浮かんだ。

僕を助けるために上履き投げた時の、あの涙混じりの顔が。

そつえばあの時、僕は自分の命など計算せず沙里を助けようとした。自分の命など勘定に入らず、ごく当たり前のように圀になる

うと思った。

愛する人のために命を投げ出す……もし、生き返るチャンスがなかったとしても、僕は同じ行動をしたのだろうか。

「柳田さん、1つ教えてください」

「なんででしょう？」

「どうしてこんな成功条件にしたんですか？」

このゲームは柳田さんの「テンプレートに従いたくない」という捻くれた考えから始まった。それだけの理由ならばこんな言葉の裏をかいいたような成功条件にする必要はない。素直に松原さんと恋仲になれなかったらアウト、とか分かりやすいものにすれば良いのだ。

「水先案内人とは、ですね……」

柳田さんがポツリと語りだした。

「亡くなった方をスムーズに天国か地獄に連れて行かなければなりません。しかし、それだけが仕事ではないのです。例えば、あなたのように不運な死を遂げて未練を残したまま亡くなった場合、私たちは極力生き返るチャンスを与えることにしています。生を全うした人か、他人を不幸にした悪人以外には天国への扉も地獄への扉も堅く閉ざすべき。それが掟だからです」

「それなら単純に生き返らせれば良いじゃないですか。なぜ条件を付けるんです？」

「未練を残して亡くなった人は、たいてい大きな問題を抱えた方々です。私たちが突き出す条件は、それら問題を解決するヒントを秘めているのです。生き返る条件を満たす、それは同時に実りある生を謳歌する一歩にもなるのですよ」

僕の場合、松原さんへの恋に区切りを付けて新しい恋を探せ。条

件の裏にそんな意図が隠されていた。

本当に生き返った時、僕の隣には……

「なんとなくですが、言いたい事は分かりました。ありがとうございます。います、柳田さんはDSな人と思っていましたが、そこまで考えていたなんて」

「はは、いいんですよ。DSは否定しませんから」
「しないんだ。」

「それにお礼を言うのはまだ早いですよ。ルールはルールなので、次のチャレンジが失敗すればあの世行きは確定されます」

「大丈夫です」

沙里のことを想う。

僕の最古の記憶は、沙里と秋彦と一緒に遊んでいた光景だ。それから人生の大半を共に過ごしてきた。苦楽を共にした、と言っても大げさじゃない。

いて当たり前、だからこそ特別な気持ちを持つことがなかった。でも、なんだろう。さつきから沙里のことを考えると胸の動悸が不安定になる。まるで、松原さんに恋焦がれていた時のように……
今ならもう一步、沙里との関係を深めることが出来るような気がする。ライオンを前に、僕も沙里も自分の命より相手を守るうとした。その絆の強さを信じる。

僕は……沙里に告白しようと思う。

「今度こそ胸を張って言えます……僕は大丈夫です。お世話になりました」

深々と頭を下げる。次に柳田さんと会うのは、ずっとずっと未来だ。

「あの人と結ばれることを祈っていますよ……ふふふ」
最後に柳田さんは笑った。ドSにふさわしい笑みで。

ふっと視界に靄がかかる。

どうやら最後のチャレンジが始まるようだ。

僕は沙里に会ったらどんな言葉をかけようか、と考えると同時に……あつ、やっぱりデコピンは必要ないんだ、柳田さんは本当にドSだ、と思った。

チャレンジ4回目 前編

「告白はうまくいきそうか？」

視界が開いた時、目の前にはいつもの明彦がいた。僕は彼にいつもじゃない返事をする。

「告白か……ああ、必ずやるよ！」

全身に力がみなぎる。気力が充実している。最後のチャレンジに挑むにあたり、最高のコンディションと言えるだろう。

沙里と早く話したい、と思った。

生まれたばかり、いやもしかしたら気づかないうちに育てていたのかもしれないこの想いを告白したい、と思った。

でも、その前にやるべき事がある。

秋彦との会話を早々に切り上げ、僕は廊下から教室に戻った。まだHRには早い。窓際で紅葉の木々を眺める松原さんの席に向かう。

「松原さん」声をかける時、以前感じた胸の高鳴りはなかった。

「……なに」約束の時間には早いんじゃない、目がそう言っている。「放課後の約束、なかったことにして欲しいんだ」

まずは、約束を無効にしなければならない。

僕が告白すべき人は、松原さんじゃない。

「構わないけど……」

松原さんとしては、面倒ごとがなくなって気が楽になっただろう、声が少し軽くなった。

「ごめん、勝手に」

僕は頭を下げ、彼女の席から離れた。

次は……

僕は携帯電話をポケットから取り出した。タイマーを16時59分にセットする。

これは警笛だ。

もしタイマーが鳴ったら、どんな状況だろうと告白を敢行する。

場所や周りに誰かいようと関係ない。四の五の言っている暇はない。最悪、沙里が近くにいない可能性もある。その場合は、文字通り死ぬ気で道行く女性相手に声をかけなければならない。告白が成功する確率は限りなく少ないだろう。まあ、そもそもタイマーが鳴った時点で僕の死は十中八九決まりだ。焦ってうまくいくわけがない。そう考えると、タイマーは警笛でもあり、死神の鈴のようでもある。

「一体どういうことだ」

携帯電話を操作していると、秋彦が話しかけてきた。僕と松原さんのやり取りを見ていたようだ。

あの世とこの世を行ったり来たりしていた僕とは違い、秋彦感覚では今の今まで「よ、よし松原さんに告白するぞ」とへっぴり腰で息巻いていた僕が反転告白を止めたのだ。疑問を持たずにはいられないのだろう。

教室では人目が多い。僕は秋彦を廊下に連れ出し、気持ちを吐露

することにした。

「見ての通りだよ」

「松原さんに告白するんじゃないのか？」

「それは取り止めた。秋彦、僕はね……ようやく本当に好きな人が分かったんだ」

「はあ？」

「だから告白はその人にする」

僕のぼかしたような言い方に、秋彦の眉が八の字を作る。まだ納得できないようだ。

もし僕が沙里を好きだと言ったら、秋彦は驚くだろうか、それとも「頑張れよ」当然のように応援してくれるのだろうか。何にしる親友には先に言っておこう。

「僕が告白するのはね……」

そこで言葉を止めた。目当ての人物が姿を現したからだ。

「ちょっと、もう休み時間は終わり、HR始めるわよ。教室に戻んなさい」

おかしい。

いつも聞く沙里の声なのにどうして……こんなに僕は動揺してい

るのだろうか。

いや、告白しようと意識はしているけど、まるで松原さんの前に立ったかのように身体が緊張する。

おいおい、大丈夫なのか僕は。

気心の知れた仲だから、告白だっていつもの他愛無いやり取りのように済ませられるかも……そう考えていたのに。今の僕にとっては、沙里と日常会話するだけでも大変そうだ。

「何持ってたんだ？」

「台本よ。役者の分、刷ってきたの」

台本を抱える手に怪我はない。獰猛な肉食獣の牙で血まみれになっていない。当然のことだが、僕は心から安堵した。

さて……

今すぐ告白すべきだろうか……いや焦っては事を仕損じる、という。

想像するんだ。

もし僕が廊下でいきなり「あんたの事が好き」と沙里に告白されたでしょう。すぐに「僕もだ」とOKするか？

いや、それはないよな。「何の冗談だ」と思っるのが落ちだ。

ムード、そうムードが必要なんだ。特に互いを空気のように感じている僕と沙里の間にはムードが圧倒的に不足している。それを補うには……

「沙里、聞いてくれ」

「ん、なに？」

秋彦に台本を押し付けながら、沙里が僕の方を向く。

「僕は主役をやるうと思う」

「おどろき。どういう風の吹き回しよ」

「どうしてもしたくなっただ。それでさ、良かったら……」

まだ告白じゃないのに、僕の胸が高鳴る。

「沙里にヒロイン役をやってもらいたいんだ」

「……………」

勘の良い人が聞いたら、これだけで告白と取るのではないだろうか。

沙里は固まっている。

「どういう風の吹き回しよ」と言っただ僕を小馬鹿にした表情のまま。きつと表情の制御を後回しにして、頭が今の言葉の真意を大急ぎで解析しているのだろう。

あつ、だんだんと顔が赤くなっていく。

「……………」

あれ、隣で聞いていた秋彦も固まっている。こっちはだんだん顔

が青くなっている。

なぜだ？

「あ、あのさ。出来れば良いんだ。考えておいてよ」

2人の反応が思ったより大きく、言った僕まで動揺する。気まずくて恥ずかしい。とりあえずお願いしたし、後はHRを待とう。

固まったままの2人から逃げるように僕は教室に戻った。

今までの経験上、きっと沙里はヒロインになってくれるはずだ。

後は台本の読み合わせで、愛の言葉を言い合ううちに良い雰囲気になって……告白する。

うん、これがベストだろう。自分の席で今後の流れをシミュレーションする。

時折、黒板の上にかかっている時計に目に入れるのも忘れない。後50分。もうコンティニューは出来ない。この50分で生か死かはつきりする。この胸の動悸の激しさは沙里を意識しての事だけでなく、迫り来るタイムリミットへの焦りも起因しているのだ。

「じゃあ、主役を決めます」

HRの最初は、これまで通り主役決めからになった。まずは僕が

立候補して、主役の座に座らなければいけない。

「立候補者はいる？」

沙里が僕を見る。沙里らしくない儚げで期待するような視線だ。僕はそれに応える。

「はいっ！」

手を垂直に伸ばし、やる気をアピールする。

「おおお~~~~！！」前回と同様に周りから驚嘆の声がする。しかし、記憶より声が大きい。

それもそのはず、今回の立候補者は2人いたのだ。

「秋彦、お前……」

「悪いな、主役は譲れん」

秋彦も手を挙げている。僕より身長がある分、迫力のある拳手である。僕は初めてこの親友を怖い、と思ってしまうた。

本当にこのHRは予想通りに進まない。前回は沙里が意外な行動に出て、今回は秋彦だ。

何が秋彦を突き動かしたのか……考えられるのは1つ。僕が沙里にアプローチをしたことだ。あの時、秋彦は顔を青くして動揺していた。もしかして、秋彦が言っていた好きな人って……沙里のことなのか。

秋彦は女子に紳士的な態度を取る。しかしそれは言い方を変える

と、女子に距離を取る態度である。そんな秋彦の例外が沙里だった。沙里だけには心置きなく会話をしていた。秋彦は沙里を特別視している、それは幼馴染だからだと思っていた。だが、そこに恋愛感情があったとすれば……恋心をついさつき自覚したばかりの僕より、秋彦の思いはずっと大きいのではないだろうか。

「え……え」と。ど、どうやって主役を決めようかな？」

沙里も秋彦の行動に困惑しているようだ。いつもの快刀乱麻な手腕が見られず、立候補者2人の処遇を決めあぐねている。

「それなら多数決は？」クラスメートから意見が出る。多数決、それは人気者を選出する数の暴力。人望厚い秋彦が圧倒的に有利だ。

「ちよつと待つてよ。劇の主役なんだから演技力が高い方を選ぶべきだ」

たまらず僕は意見した。

チャレンジ2回目で行った秋彦の演技を思い出す。あれくらいなら僕にだって勝機はある。

「そ、そうね。じゃあ、台本の適当な箇所を2人に読んでもらって決めちゃおう」

沙里が賛同してくれた。多数決では僕が負けてしまうと分かって肩入れしてくれたのだろうか。

そうであって欲しい……もし、沙里が秋彦のことを特別に思っていた場合、僕は死ぬ。

「分かった。だが、演技勝負なら相方が欲しい。ヒロインを先に決

めて、ヒロイン役の人との掛け合いで勝負しよう」

秋彦の提案に添って、先にヒロイン選出から行うことになった。沙里は僕の頼みを聞いてくれるだろうか。ある程度の自信があっても、

「あたしがやるわ」

と名乗り出た沙里を見るまで僕の心拍は早いリズムを刻んでいた。

良かった、沙里は応えてくれた。

後は秋彦との勝負に勝てば……と思ったのだが、さらなるイレギュラーな事態が発生してしまった。

こっちでも候補者が2人出たのだ。

「私も立候補します」

松原さん、なんでだよ……

チャレンジ4回目 中編

主役・ヒロイン決めは話し合いの結果、まず2人1組のペアを作り、それぞれ告白シーンを演じることになった。その後、ペアを問わず演技力の高いと評価された2人が正式な主役とヒロインになる、そういうルールとした。

くじ引きによってペアは『僕と松原さん』、『秋彦と沙里』に分けられた。

チャレンジ3回目であれほど望んだ松原さんと今さらペアになるなんて……本当に運命という奴は捻くれものだ。

机や椅子を後ろに寄せ、教室の前半分に演技可能な空間を作る。僕ら4人以外のクラスメートは、遠巻きに野次や声援を飛ばしながらこちらを凝視している。

だが、僕にとって彼らの視線な路上のゴミと同じ、気にもならない。

気にすべきは、時間と秋彦だ。予想外の展開でHRは伸びに伸びている。今は16時30分。後30分で沙里に告白しなければならぬ。

もし、HRがリミットまでに終わらないとどうなるだろう。

追い詰められた僕には、衆人環視の中でも告白する勇気を用意している。だが、沙里が告白を受ける勇気を持っているかは分からない。他の人の前では恥ずかしがって告白を断ったり、または保留にして逃げ出す可能性だってある。

そうなれば死ぬ、おしまいだ。やはり2人っきりの場所で告白した方が賢明だろう。

そして秋彦……沙里はきっと僕のことを憎からず思ってくれてくれる。

希望的観測かもしれないが、ヒロインの頼みを受け入れたことがその考えを後押ししてくれる。だが、この演技勝負に負けて沙里の隣を秋彦が取ったならば、沙里は秋彦のことを意識するかもしれない。

秋彦と沙里、この2人がお互いを気になる相手と思っていたら、僕の告白は失敗に終わる。

是が非でも勝たなくてはいけない。秋彦の思いを踏みにじっても勝つ。死にたくないという気持ちと、沙里を取られたくないという気持ちが強固な覚悟を構築する。

それぞれ台本に目を通した後、僕と松原さん組から告白シーンを演じる運びになった。僕は秋彦と違って、このシーンの演技は2回目だ。このハンデは大きいぞ。

クラスメート約60の瞳が僕たちを見る。一度、深呼吸して台本を片手に据える。相対する松原さんの顔は真剣そのもの、すでに覚悟完了のようだ。

秋彦と親密になるためなら何でもやるのか。彼女の本気をひしひしと感じる。

「それでは、始めてちょうだい」
沙里の言葉の後、教室から音が消えた。

「月が綺麗だね」
その沈黙を僕の台詞が破る。

「そうね、吸い込まれそうなくらい素敵」

おお、と幾ばくかの歓声が上がる。

うまい、屋上で読み合わせた時のものとは別人だ。
台詞に込める感情も見事なものだが、それだけじゃない。全身全霊で役になりきっている。主人公の隣に立ち妖艶な仕草で月を眺めるヒロインがそこにいる。僕のように手に台本を持っているわけでもない。

あの短時間で暗記したのか……

松原さんの予想以上の演技力に引き込まれそうになる。
いけない、このままでは演技を食われる。松原さんしか印象に残らないやり取りでは、僕の評価が悲惨なものになってしまう。僕だってこの演技にかける思いで負けてはいないのだ。

「百万ドルの夜景と、煌びやかな夜空。どちらも美しい。でもね、僕はそれ以上に美しいものを知っているんだ」
恥ずかしがらず口に出す。目の前にいるのが沙里だったら、そんなフィルターを施して気持ちを高ぶらせる。

「なにかしら」
小首をかしげるその姿は、もう気がないはずなのに心臓を叩いてくる。クラスメートの誰をも魅了する可愛らしさだ。なんて恐ろしい。

「君だよ」

「まあ」

「冗談じゃないよ。こんな美しい君は罪だ。僕が逮捕しなきゃいけない。ずっと僕の隣にいてもらう」

松原さんに手を差しのべる。

「それって……」

「ああ、君が好きだ。僕と一緒にしてくれ」。

「ふふふ、情熱的ね。私の答えは……」

ゆっくりと松原さんの手が、僕の手を重ねる。しつとりと柔らかい手だ。

「喜んで」

盛大な拍手で集中していた意識が元に戻る。

クラスメート誰もが手を叩いて「すげー本当の告白かと思った」

「松原さん素敵過ぎる!」「これ決まりじゃね」と口々に好評価を告げる。

やった、我ながら名演技だった。これなら見た目で負けていても、秋彦との差を演技で埋めることが出来る。

「ふう……」

松原さんが一仕事を終えた後のため息を控えめに吐く。その大人しめな様子に、つい今しがたクラス中を虜にした跡はない。大きな舞台の上においてもおかしくない演技だった。

果たして、沙里は松原さんに勝てるのか。拍手が鳴り止まないこの教室で、場違いな仏頂面している沙里に僕は静かなエールを送った。

沙里と秋彦のペアの演技も悪くはなかった。必死さは伝わってきたし、台詞にはよく感情が込められていた。ただ初めて特有のぎこちなさを隠し通せるほどではなかった。

沙里も秋彦も自分の演技で一杯になり、連携が取れていなかったのだ。そのため会話をしているというよりは、交互に言葉を口にしている。そんな印象を拭えなかった。

終わった直後の沙里に

「お疲れ」

と僕は声をかけた。でも、沙里は下を向いて

「ごめん」

と言っただけだった。それが結果を物語っていた。

黒板に書かれた『主役』『ヒロイン』の文字の下に、副委員長の男子が僕と松原さんの名前を加えた。

委員長の沙里は自分の席に戻り、俯いたまま顔を上げない。周りはそんな沙里をしばらくそっとしておこう、と判断したようで「可哀想だ」という視線は送るものの声は送らない。

松原さんは当てが外れた結果に僕を1度睨んだ後、窓際の自分の席に戻って紅葉の木の方を向いたまま動かない。

秋彦は特に気落ちした雰囲気を見せず、他の役を決める話し合いに参加している。目的が僕と沙里をくっ付けられないことなら、この役選んで唯一満足のいく結果を得たのが秋彦なのだ。

くそつ、僕はその涼しげな横顔を殴りたくて仕方なかった。

HRが終わる。16時50分、今までで一番短い放課後が訪れた。僕はすぐさま席を立ち、沙里の方へ向かおうとする。しかし、その行動を遂げることは出来なかった。僕の手を秋彦が掴んだからだ。

「なあ一緒に帰ろう」

強引だ。普段何気なく言う「一緒に帰ろう」じゃない強制力を持った誘いだ。あくまで僕を沙里から遠ざけようというのか。

僕は、その手を振り払った。

「断る！」

考えてみれば秋彦をここまで拒絶したことはなかった、親友にここまで敵意を剥き出しにしたこともなかった。だが、悲しいかな今の僕にとって秋彦は死神そのものだった。だから、容赦のなく秋彦を突き放す。

「わ、悪かった」

主役に立候補したことが、沙里の所へ行くのを邪魔したことが、どちらの謝罪かは分からない。無論、どちらも許しはしない。

身長が高い秋彦が僕より小さく感じる。僕の怒りにショックを受け、猛省しているようだ。それでも僕の怒りには焼け石に水だ。

「先に帰ってくれ」もう話す事はない。

僕は秋彦に背を向けて、改めて沙里の席に向かった。沙里はHR中からまったく変わらず下を向いている。長い髪が垂れ下がって顔を隠すが、聞こえてくる嗚咽で沙里が今どんな表情をしているのか想像がついた。

「沙里……」

秋彦にはこれまでにない冷たい言葉を伝えた口が、今度はこれまでにない暖かい言葉を出す。

「劇のことはごめん」

元はと言えば、『演劇でムードを作って告白しよう』などと僕が余計な小細工をしたのがいけなかった。沙里にいらぬ傷を負わせてしまった。堂々と放課後に呼び出して告白すれば良かった話なのに。

「……………謝るの、あたしでしょ」

無言で返されるのかと心配したが、コミュニケーションを取れそう
だ。

「あたしの演技が下手だから……………せつかくあんたが誘ってくれたの
に」

魂の慟哭、とても言うのだろうか……………沙里の無念さが伝わってくる。
でもな沙里、僕は。

「いいんだ。一緒に演技が出来なくても大したことないんだよ、別
に」

僕はただ君ともっと親密になりたかったただけなんだから。演劇だけ
が手段じゃない。

突然、沙里が顔を上げた。泣きはらした赤い目の中に僕が映る。

「大したこと……なかった？」今にも散ってしまいそうな声。

「え……ああ」

僕は失言してしまった。

刹那、顔が弾ける。頬に痺れを伴う痛みが走る。沙里のスナップの効いたピンタが瞬時に事を起こしたのだ。

「酷い！あの誘いは、あの誘いには……意味があるって信じたのに！」

沙里が怒りを、いや悲しみを爆発させる。立ち上がって、僕の襟を掴み締め上げる。

しまった、誤解だ、僕が言いたかったのは……

「そりゃあんたは満足よね。憧れの松原さんと舞台に立てるんだから。しかも恋人役、ああお熱いことで！」

「ちが、ちがううう……ぐっ」

否定する言葉を出す前に、鳩尾に沙里の拳がめり込む。

「あたしが、あたしがどんな気持ちでヒロインになろうと思ったか分かるの！分からないでしょうね、あんたはいつもそうよ。人の気持ちをよく考えずに傷つけてばかり。もうそれで一喜一憂するのはこりこりよ！馬鹿、この大馬鹿ヤローッ」

どこにそんな力があるのか沙里は僕を投げ飛ばした。受身など取れるはずもなく、机を何台か巻き込みながら僕は地に沈む。

「きゃああ！」

教室に残っていた数名のクラスメートの悲鳴が聞こえる。背中や首

が鈍くズキズキした苦痛を訴える。目がチカチカする、という比喩を僕は初めて体験した。

「ふん！」

沙里が教室から出て行く。まずい、倒れたまま頭上の時計を見る。リミットまで5分を切っている。

今、沙里を見逃したら僕は終わりだ。

「うつ、くそっ」立ち上がる。痛みに構っている暇はない。

「おい保健室行けよ」という級友たちに背を向けて廊下に出た。沙里の姿は……いた！ちょうど階段の方へ曲がった所だった。

「さりいいい、待ってくれ！」

階段へ急行するも姿はすでになかった。見失ってしまった。下に降りて行ったのか……それともこの上の屋上に向かったのか……二者択一、間違ったら死ぬ。

考えている時間は皆無。頭が回答する前に足が回答していた。両足が全力で稼動して階段を移動する。

お願いだ、神様でも柳田さんでもいい、沙里に告白させてくれ！誤解されたままで死ぬなんて、絶対に嫌なんだ！

チャレンジ4回目 後編 ラスト

屋上。

僕はすっかりおなじみの死に場所にたどり着いた。

荒い息を整えるのも忘れ、首を右へ左へ動かし人影がないか探す。

だ、誰もいない。

見晴らしの良い屋上でそれを認識するのに10秒かった。ほとんどの時間は、絶望という結果を認めるのに費やした時間だ。

も、もうダメだ……そう、落胆の海に沈みかけた僕の耳に音が入った。

風の音に紛れて本当に小さい音だがこれは……鼻をかむ音？

沙里の顔を思い出す。あいつ泣いていた。僕の一言で泣きながら怒っていた。

音は過去のチャレンジで破裂した貯水タンクの裏から聞こえてくる。

沙里、君はそこにいるのか。裏に回ろうとするが、寸でのところで足を止める。僕の姿を見たら沙里はまた激昂してどこかへ走り出すかもしれない。もう追いかける時間はない。

今、ここで勝負するしかない。

「聞いてくれ！」

木枯らしなんぞに負けないよう声を張る。

「僕は謝りたい。お前を傷つけたことを」
鼻をかむ音が聞こえなくなった。

「悪かった。気持ちを伝える方法が下手でごめん。僕さ、やっと気付いたんだよ。昔から一緒だったお前がさ、ただの友達とか幼馴染だとかそんなものより、もっともって大切だということに」

過去の思い出を――

「自分でもビックリしたよ、お前と話すのが辛くなるほどドキドキするんだ。前は平気だったのに」

今の気持ちを――

「でも、このドキドキが僕に告白する勇気を与えた。なあ、聞いてくれ……」

そして、2人で歩き出したい未来への希望を――この一言に。

「僕はお前が好きだ、好きなんだ、大好きだよおお！」

携帯電話のバイブレーションがポケットの中で響く。
16時59分。僕の命は残り1分……

沈黙。

僕と沙里はどちらも言葉を発さない。

早く、早く返事をくれっ、そう叫んでしまうのを懸命に抑えながら、僕は永遠とも一瞬とも錯覚する時間の中……待ち続けた。

やがて。

こつこつ、と足音がタンク裏から聞こえた。こちらに向かって歩いてくる。

沙里、僕の告白に応えてくれるのか。
僕は涙を浮かべながら笑顔で迎えた。

「ありがとう、さ………ほえ？」

もう嫌だ。我が人生、どうしてこんな予想もしない展開を好むんだ。

貯水タンクから姿を見せてくれるのは沙里じゃなきゃおかしい。ここまで来たら普通、ヒロインが出てきて告白を受け入れ、リミット数秒前で逆転ホームラン！

あとは沙里の肩に腕を回して夕日を見ながら『THE END』でいいじゃないか。どうして素直にその展開へ持っていけないのだ。おい神様よ！

貯水タンクの裏から現れたのは——秋彦だった。

「そ、そのなんだ……」

髪をかきながら恥ずかしそうに出てきた。なぜお前がタンクの後ろにいる？

「お前を怒らせてしまつて……屋上で頭を冷やしていたんだ」
今の僕なら頭だけでなくて全身を冷やしてあげるよ。それも二度と温まることのない身体にしてあげる。

つてもう時間がない。

沙里はいない。告白出来ない。生き返る条件を満たせない。
つまり、つまりつまり！

駄目だ。やっとここまで来たのに……死にたくない、うわあああ
ああああああああ。

「俺も好きだ」

うわああああああ………あ？
今………なんと？

秋彦の顔が気持ち悪いくらい紅潮している。夕日のせいでは済ま
されないほどに。いや、まじで夕日のせいにしてください。潤んだ
瞳が僕の背筋を絶対零度まで凍らせる。

「嬉しいよ、こんな気持ち、きつとお前は理解してくれないと思っ
ていたからさ。まさか両思いだったなんて……こんなに素敵なこと
はない」

ちょっと秋彦さん！冗談と言ってくれ。
でも、それは冗談でも何でもなかった。僕は携帯を見た。
『17時1分』。

僕は生きている。やっと生き返られたんだ！と、涙流して喜ぶと
ころなのに、『生き返った』秋彦が本気で僕の告白を受け入れた』

という式が成り立ってしまふことに別の涙が流れそう。

「てっきりお前は沙里のことが好きだと思ったよ。劇の相方に指名なんてするからさ……失恋したって本気で泣きそうになった」

いや、僕が好きなのは沙里だよ。輪廻転生を繰り返しても秋彦を好きになることは未来永劫ないよ。

そつえば……これまでの秋彦の言動が蘇る。

チャレンジ2回目ですわらず飛びついた時、特に嫌がらなかった秋彦。僕が校舎裏に誘った時、妙にそわそわしていた秋彦。他にも色々……そう、秋彦にフツてもらった時の松原さんの豹変も説明が付く。秋彦の奴、僕が好きなのであなたとは付き合えない、とか言っただろう。そりゃ後でこのこやって来た僕に彼女が怒り狂ったのも無理のないことだ。

松原さんへの告白を応援したのは、僕の告白が成功することはない余裕の表れか。対して、沙里の場合は告白がうまくいくと思い、妨害に出たのか。

なんてことだ。考えれば考えるほど、秋彦がホモサピエンスからサピエンスを引いた種類の方だと確信してしまう。

「ちょっと待ってくれ、これは誤解なんだ」

「待つのはもういいだろう。もう我慢しなくていいよな」

秋彦がじわじわと近づいてくる。ライオンよりこええええ！

逃げ出そうとしたが、秋彦にガツチリ抱きしめられた。
うげええ、たくましい胸板が顔に当たって……男臭が容赦なく鼻
に入りこむ。脱出しようともがくが、秋彦のロックは強固過ぎてビ
クともしない。

し、死なせてくれ。

明彦に抱かれ続けるくらいなら、一思いに死なせてくれ。

柳田さん、お仕事ですよ……あはは。

僕の意識が朦朧とし、いよいよやばくなってきた時。
乱入者が現れた。

「良かった、ここにいたんだ」

沙里、お前はどうして変なタイミングでしか現れないんだ。

胸板の隙間から見えるその表情は先ほどとは打って変わり、なぜ
か生き生きとしている。

「ねえ、さつき松原さんに会ったらね。劇のヒロインを譲る、って
言ってくれたの。感謝しなさいよ！お望みどおりヒロインになった
んだから。大したことないって言ったあんたの考え、必ず変えてや
るわ！」

悲しみをバネにして自ら立ち直ったようだ。本当にタフな女の子だ。

「……………つて男同士で何抱き合ってたんの？」

「沙里、いい所に来た」

ようやく秋彦が拘束を解いた。僕は急いで距離を取って、大きく深呼吸して体内の空気の入れ替えに勤しむ。

その間に秋彦と沙里は、

「俺はこいつと付き合うことにした」

「秋彦、まだ春には半年もあるのよ。脳にお花が咲くのは早いわ」

「負け惜しみの皮肉か」

「違うわよ！まったく元々そっちの系の人間だとは気付いていたけど…………やるんなら他の男子にしなさいよ！」

「俺はそっち系じゃない。たまたま好きになったのが男のこいつだった、それだけの事だ」

「なお悪いわ！」

と、口喧嘩を始めた。

はは、なにこの三角関係。矢印の方向が間違っていないか……

僕はけたたましく悪口の応酬を繰り広げる2人から離れ、茜空に見上げた。

「ぶ。ぶ。ぶ。やっぱりあなたほど眺めていておもしろい人はいませんか」
「ドSな人の声を聞いた気がした。」

まあ、ともかく生還おめでとう、僕。

問題は山済みだけど。

劇のことも、これからどう元親友と接していけばいいのか未定だけど……ゆっくりこなしていこう。

もう1時間なんてムチャなりミットはないんだから。恋でも何でも時間が必要なんだよ。

とりあえず最初に解決すべき問題は……

僕はため息1つ、幼馴染2人をどう治めようか考えあぐねながら、罵詈雑言を並べ立てる彼らに近づいて行った。

チャレンジ4回目 後編 ラスト（後書き）

ここまで読んで頂き、誠にありがとうございます。直球の恋愛小説を書けるほど、自分は経験豊富ではないので……このようなコメディーとファンタジーを組み合わせた作品になりました。この小説が、皆様に僅かでも有意義な時間を提供出来ていたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0953j/>

恋に時間を

2010年10月21日13時18分発行